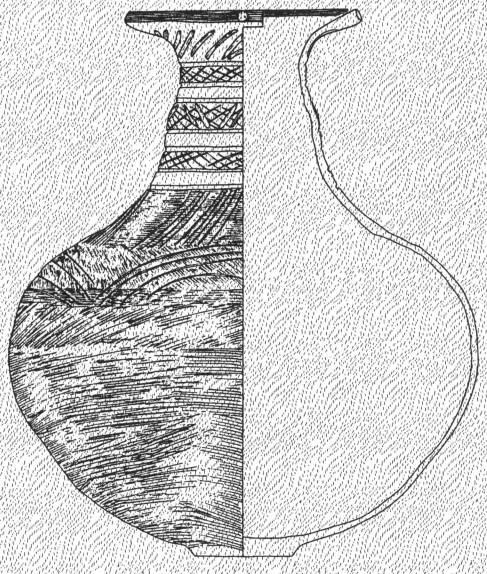
II　遺跡調査の概要



調査の理由と工程

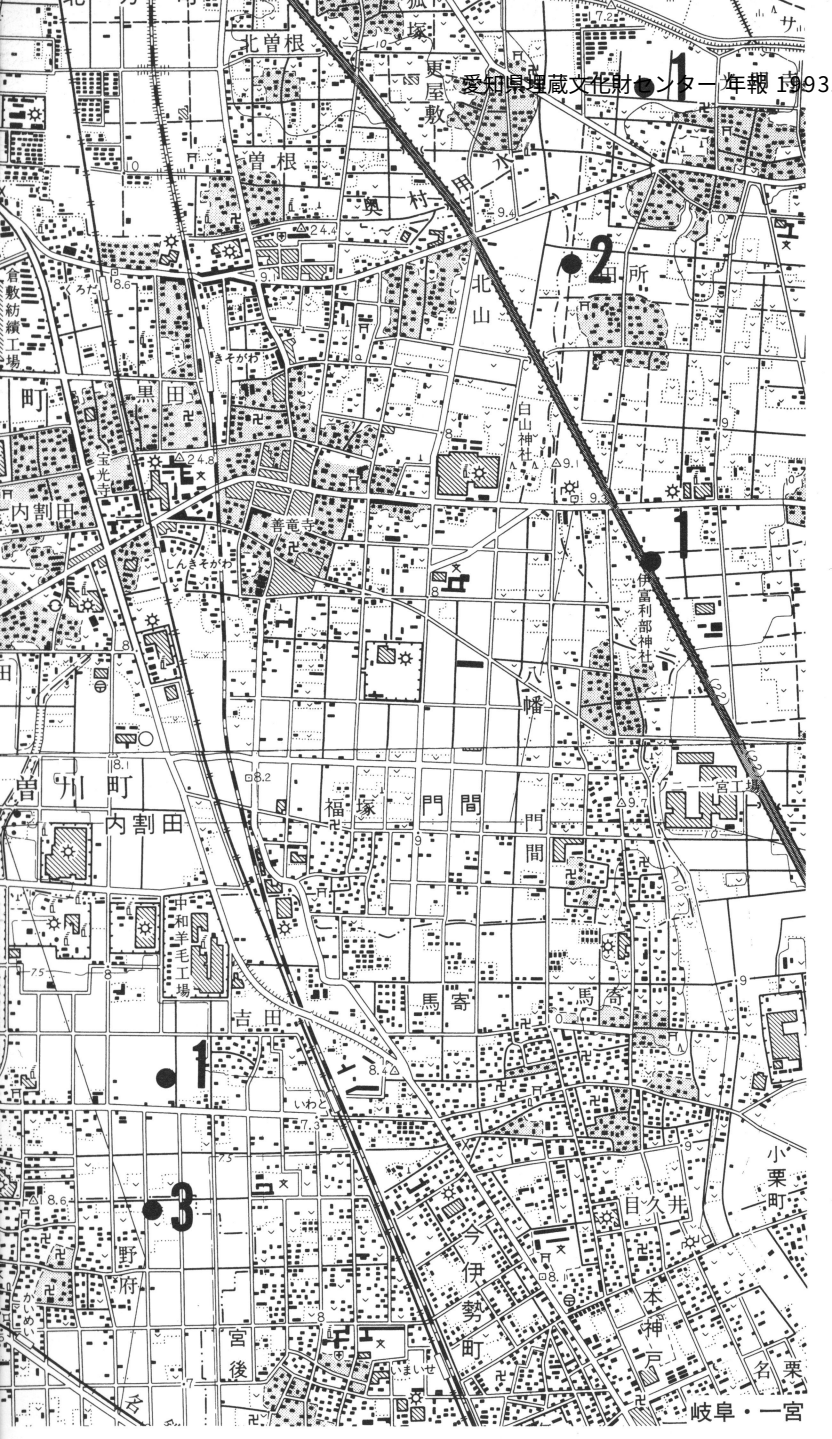
1．発掘調査

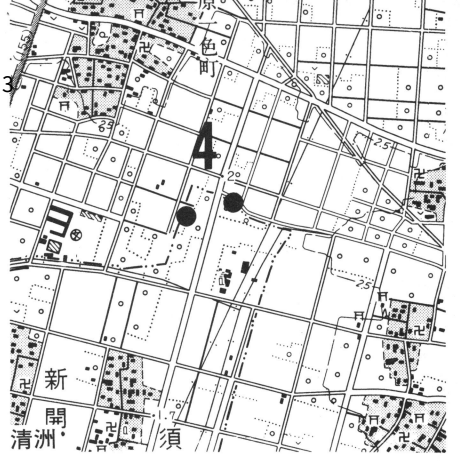
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
建設省	国道23号バイパス	牛ノ松遺跡	A	3000	92．6～92．8	大橋・宮腰・川井
			B	1300	92．4～92．5	大橋・宮腰・杉浦・川井
			C	5700	92．12～93．2	大橋・川井・余合
		(13000㎡)	D	3000	92．8～92．11	大橋・宮腰・川井
	国道302号拡幅	貴生町遺跡	A・B	1088	92．4～92．5	鷲見・樋上
	(1399㎡)	月縄手遺跡	A・C	311	92．9～92．12	鷲見・樋上
(14939㎡)	小田井山田共同溝	貴生町遺跡	C	540	92．7～92．8	鷲見・樋上
日本道路公団	東海北陸自動車道	西上免遺跡		260	92．4～92．5	太田・服部
		田所遺跡他	試掘	450	92．4～93．3	赤塚・鬼頭
		田所遺跡	A・B	1000	92．7～92．11	太田・赤塚・服部・鬼頭
			C	580	92．7～92．11	太田・赤塚・服部・鬼頭
			D	770	92．7～92．11	太田・赤塚・服部・鬼頭
			E	1050	92．11～93．3	太田・赤塚・服部・鬼頭
			F	1250	92．11～93．3	太田・赤塚・服部・鬼頭
			G	1020	92．11～93．3	太田・赤塚・服部・鬼頭
	(7860㎡)	(7150㎡)	H	1480	92．11～93．3	太田・赤塚・服部・鬼頭
愛知県総務部	東三河総合庁舎	吉田城遺跡		2600	93．1～93．3	都築・杉浦・小嶋
愛知県土木部	新川甚目寺線	外町遺跡	A・B	680	92．5～92．7	大竹・小嶋
(都市整備課)						
(下水道課)	下水道浄化センター	一色青海遺跡	試掘	300	92．5・93．1	松原・赤塚・鬼頭
(道路建設課)	新川清洲線	清洲城下町遺跡	A	400	92．7～92．9	大竹・蟹江
		(1010㎡)	B	610	92．7～92．9	大竹・蟹江
	加納東保見線	伊保遺跡		500	92．7～92．8	赤塚・鬼頭
	豊田知立バイパス	黒笹40・89号窯跡		2100	92．11～93．1	野本・小澤・杉浦
	橋梁改築	島田陣屋遺跡		1000	92．9～92．12	都築・小嶋
	島崎豊田線	坂口遺跡		455	92．4～92．8	都築・松田
(河川課)	五条川改修	清洲城下町遺跡	C	220	92．11～93．1	大竹・蟹江
			D	220	92．11～93．1	大竹・蟹江
			E	220	92．11～93．1	大竹・蟹江
(6945㎡)		(900㎡)	F	240	92．10～92．11	大竹・蟹江・鈴木

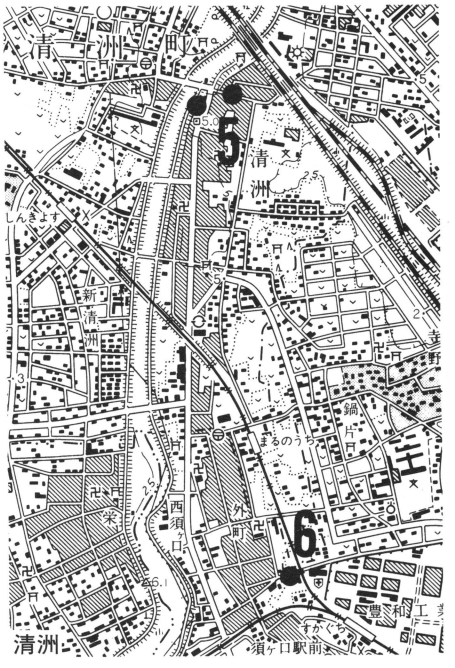
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
愛知県企業庁	内陸用地造成	子持古窯跡	1300	92．6～92．10	野本・小澤・杉浦
愛知県道路公社	知多中央道拡幅	立楠古窯跡	600	93．1～93．3	鷲見・樋上

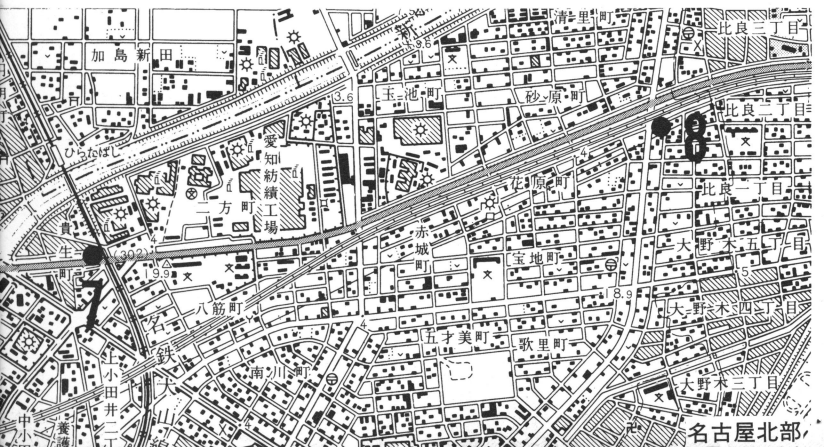
2．整理報告書

調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省	名古屋環状2号線	朝日遺跡	49624㎡	昭和56・昭和60～平成元年度
日本道路公団		松河戸遺跡(整理)	65306㎡	昭和62～平成3年度
建設省	国道23号バイパス	岡島遺跡	19000㎡	平成元～平成3年度
		不馬入遺跡	400㎡	平成3年度
		室遺跡(整理)	8800㎡	平成3年度
愛知県土木部	新川清洲線	清洲城下町遺跡(整理)	2297㎡	平成元～平成4年度
(道路建設課)	名古屋祖父江線	堀之内花ノ木遺跡(整理)	7100㎡	平成3年度
	蒲郡・碧南線	東光寺遺跡	10000㎡	平成元～平成2年度
	加納東保見線	根川遺跡	300㎡	平成2年度
		伊保遺跡	4442㎡	平成2～平成4年度
	島崎豊田線	坂口遺跡	821㎡	平成3～平成4年度
	馬飼井堀線	跡ノ口遺跡(整理)	2560㎡	平成3年度
		一色長畑遺跡(整理)	880㎡	平成3年度
	稲沢祖父江線	舟橋宮裏遺跡(整理)	1600㎡	平成3年度
	坂上花沢線	高樋遺跡	500㎡	平成3年度
	新川甚目寺線	外町遺跡(整理)	2570㎡	平成3～平成4年度
	仁王川改修	三斗目遺跡	1600㎡	平成3年度
(都市整備課)		三本松遺跡	940㎡	平成3年度
(河川課)	五条川改修	清洲城下町遺跡(整理)	28370㎡	昭和61～平成4年度
愛知県衛生部	尾張看護専門学校増築	山中遺跡	1600㎡	平成3年度
愛知県警察本部	総合科学センター建設	名古屋城三の丸遺跡	3600㎡	平成3年度



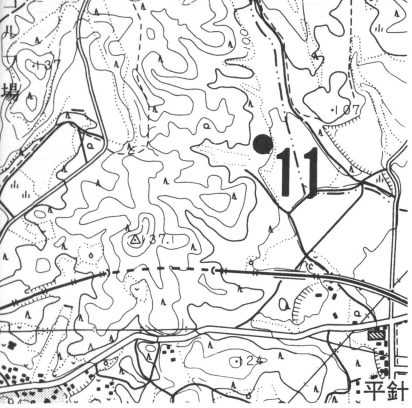






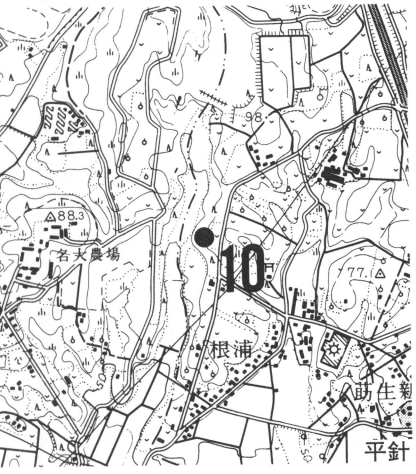
1．東海北陸自動車道試掘調査
2．田所遺跡
3．西上免遺跡
4．下水道浄化センター試掘調査
5．清洲城下町遺跡
6．外町遺跡
7．貴生町遺跡
8．月縄手遺跡

（国土地理院発行
1：25,000 地形図使用）







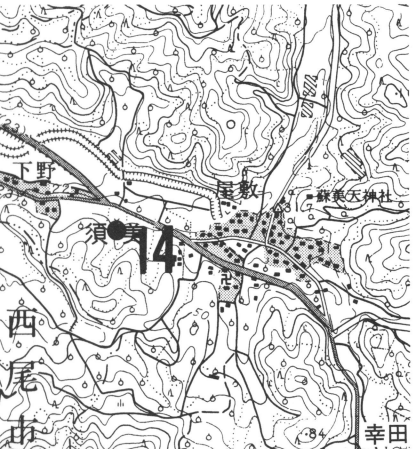


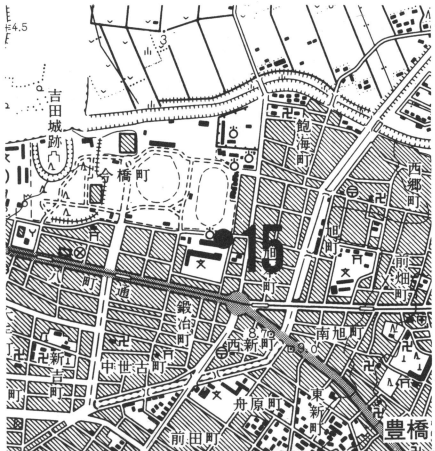
9．立楠古窯跡
10．黒笹 40，89 号窯跡
11．子持古窯跡
12．伊保遺跡
13．坂口遺跡

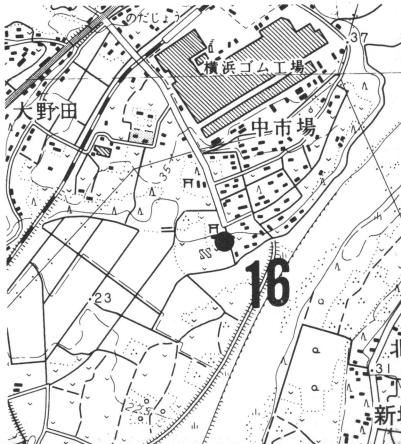




14．牛ノ松遺跡
15．吉田城遺跡
16．島田陣屋遺跡







貴生町遺跡

調査の経過　貴生町遺跡は、名古屋市西区貴生町に所在する。地理的には濃尾平野南東端の沖積地上で、五条川・庄内川などに挟まれた地帯にいくつも存在する微高地上の一つに立地している。周辺には、西方約１kmに朝日遺跡、東方約１kmには月縄手遺跡などがある。発掘調査は、名古屋環状２号線建設にともない、昭和53年、名古屋市教育委員会によって開始されて以来、これまでに名古屋市教育委員会と本センターによって数次にわたって行われてきた。今年度は、国道302号拡幅にともなう1088㎡（Ａ・Ｂ区）、国道302号側道部の小田井・山田共同溝建設による540㎡（Ｃ区）の発掘調査を実施した。　（鷲見　豊）

遺構と遺物　92Ａ・Ｂ・Ｃ区で検出された遺構は古墳時代前期と戦国時代以降の二時期にわかれる。この遺跡の基本層序は上から、１ｍをこえる客土層、近・現代の水田耕土・床土層、戦国期以降の遺物包含層であるやや青みをおびた茶褐色砂質土層、古墳前期の遺物包含層である暗茶褐色粘質土が堆積し、明黄褐色砂質シルトの地山面にいたる。遺構検出はこの地山面で二時期同時におこなった。古墳時代に属する遺構としては、Ｃ区西端をほぼ南北に流れるＳＤ01、やはりＢ区西端に位置する南北溝ＳＤ02、Ｂ区西半部のＳＫ01などがあり、そのほかにも調査区全域で足跡と思われる小ピットを多数検出した。

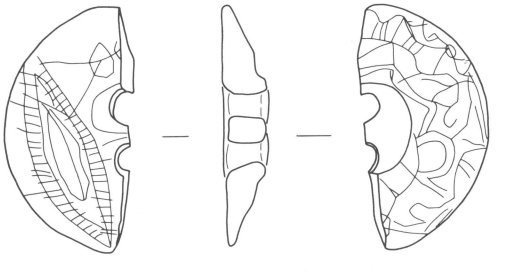
戦国期以降の遺構としては、Ｂ・Ｃ区東端部を南北に貫いて流れる幅約7.5ｍ、深さ約2.5ｍの自然流路ＮＲ01、Ｃ区東半部を東西方向に流れてＮＲ01に注ぎ込むＳＤ03、Ａ区の東西溝ＳＤ04のほか、古墳前期同様に足跡状の小ピットが多数みつかっている。

古墳前期の遺物はＳ字甕など若干の破片が上記の遺構のほか、戦国期以降の遺構からも出土している。なかでも注目されるのは表裏両面に線刻で模様をほどこした滑石製の有孔円板である。断面は紡錘車状の薄い截頭円錐形を呈し、中央部二ヶ所に穴をあけている。ＮＲ01からの出土であるが、材質・模様などから古墳前期に属するものと考えている。

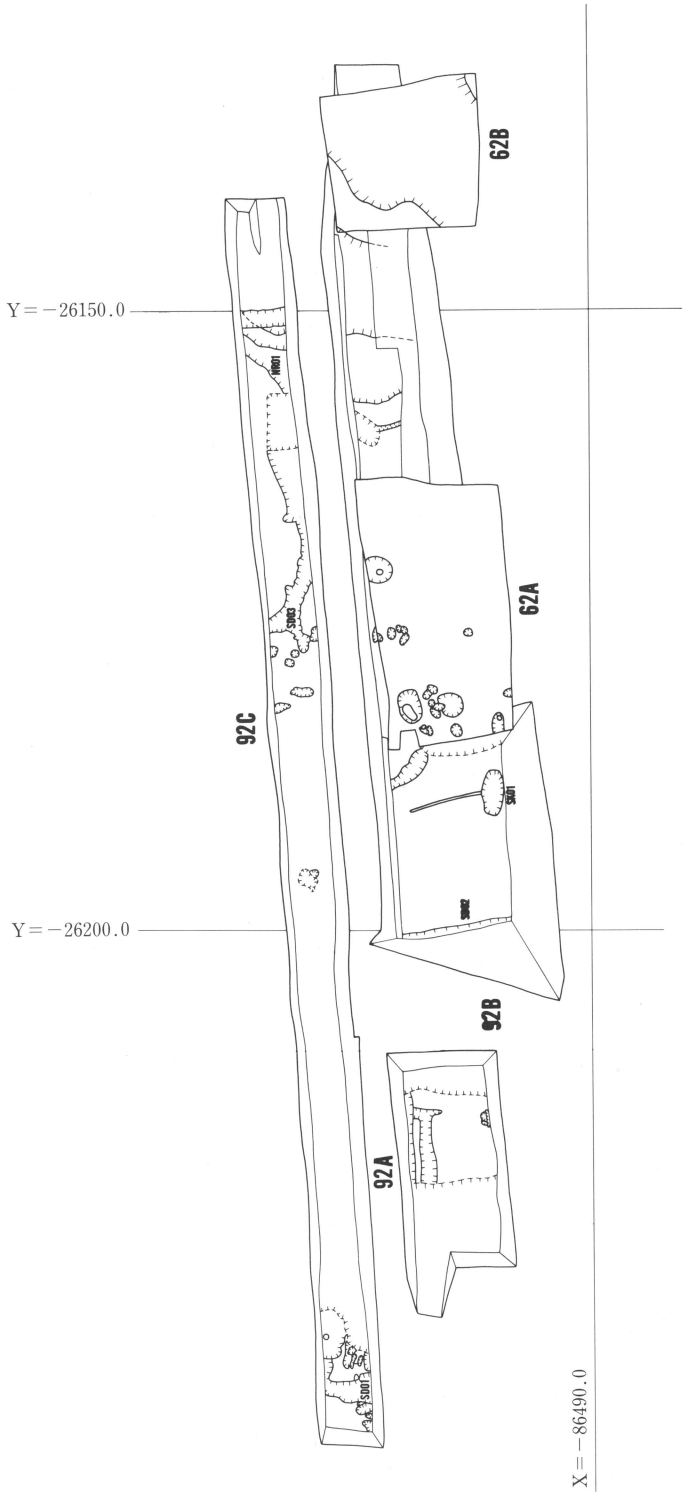
このほか、ＮＲ01の西肩付近からは人骨の破片が数点出土している。　（樋上　昇）



ＮＲ01土層断面（92Ｃ区）



線刻有孔円板実測図（１：１）



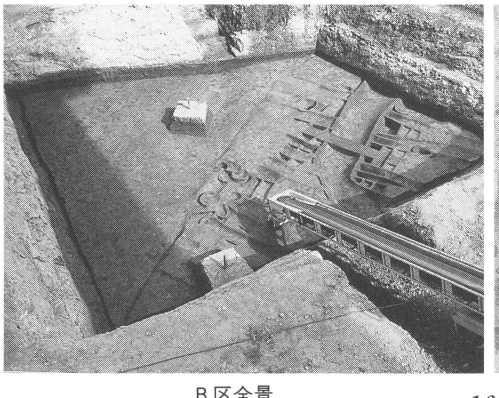
貴生町遺跡遺構図（Ⅰ：300）

月縄手遺跡

調査の経過　月縄手遺跡は、名古屋市西区比良地内に所在し、名古屋市北西部を流れる庄内川右岸の微高地上に位置している。名古屋環状２号線（国道302号）の橋脚建設に先立ち、昭和62年に発掘調査が行われ、古墳時代前期の遺構と、さらにその下層で弥生時代前期にさかのぼる遺構面が確認されている。今年度は国道302号拡幅にともなう事前調査として、311㎡（Ａ・Ｂ・Ｃ区）の発掘調査を実施した。（鷲見　豊）

上面（古墳時代前期）の遺構　62Ａ区をはさんで西と東に設定した92Ａ・Ｂ区（以下、単にＡ・Ｂ区と記す）では複雑に重複して掘削された溝を、92Ｃ区では溝と土坑を検出した。

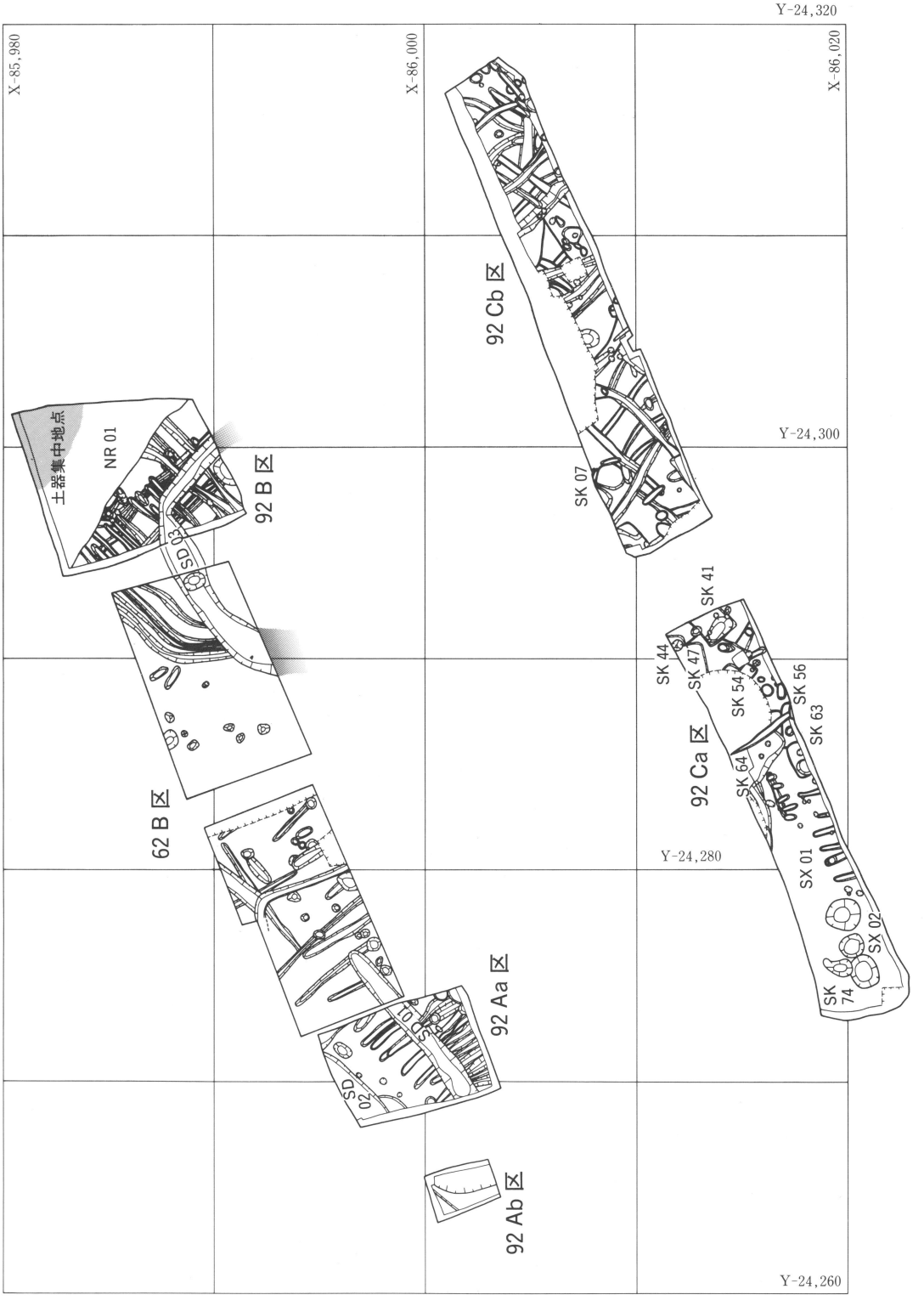
Ａ区は調査の都合上Ａａ区とＡｂ区にわけている。Ａａ区では北東から南西にのびる溝（ＳＤ01）とその北側に平行する溝（ＳＤ02）、これらと直交する小溝多数がみつかっている。このうち、ＳＤ01は62Ｂ区で検出されたＳＤ19の西延長部分にあたる。Ａｂ区ではＡａ区のＳＤ02の西側の肩を確認した。このＳＤ02は後述する弥生前期環濠ＳＤ101が完全に埋没し切らなかったために形成されたくぼみである。Ｂ区では調査区の北西隅から南東隅に対角線状にはしる緩やかな崖面があり、その東側は谷状の落ち込みとなっている（ＮＲ01）。ＮＲ01からは廻間Ⅲ式を主体とする土器数点が集中して出土している。調査区西側ではＡａ区と同じ方位をもつ小溝が重複して掘削されている。そして、これらの溝をすべて切るかたちでＬ字に折れ曲がる溝ＳＤ03を検出した。これは62Ｂ区のＳＤ03とつながり、コの字状になる。方墳の周溝と考えられる。Ｃ区もＡ区同様Ｃａ・Ｃｂと２つの調査区にわけて調査をおこなった。Ｃａ区では西端部で大量の土器が集中して出土した。特にＳＸ01・02、ＳＫ74からはやはり廻間Ⅲ式を主体としたきわめて良好な一括資料が得られた。ＳＸ02からは木製農耕具の膝柄鍬も出土している。調査区東半部でみつかったＳＫ41・44・47・48・54・56・63・64は竪穴住居跡である可能性が高い。Ｃｂ区ではＡ・Ｂ区とほぼ同じ方位をもつ小溝が複雑に重複して掘削されている。



Ｂ区全景



ＳＸ02遺物出土状況



上面遺構図（古墳時代前期）（1：300）

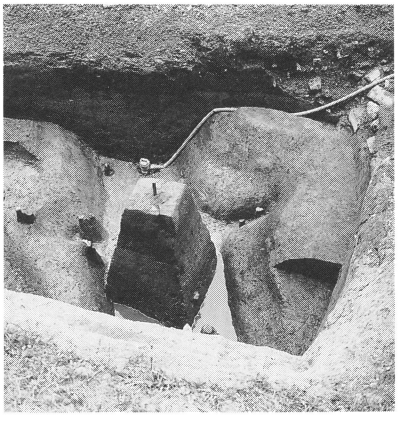
下面（弥生時代前期）の遺構　古墳前期のベースである淡灰色シルト層が約30cmあり、その下で弥生前期の遺構面が確認されている。この前期の遺構でまず特筆すべきは、Ａａ・Ａｂ区からＣａ区西端部につながる溝ＳＤ101である。規模は幅約４ｍ、深さ約1.5ｍ、断面は逆台形で、集落の周囲にめぐらせた環濠であろう。Ｃａ区では環濠に接して長楕円形の土坑ＳＫ141がある。ここからはほぼ完形の遠賀川系壺（写真）を含む多くの土器が出土した。また、ＳＫ109・126・127は竪穴住居跡の可能性があり、Ｂ区の自然流路ＮＲ101の西肩崖面や、Ｃｂ区ＳＫ101・103・105・106・107・121、ＳＤ102などの遺構からも良好な資料が出土している。



Ca区全景

まとめ　今回の調査により、月縄手遺跡に関してさまざまな新しい知見が得られた。

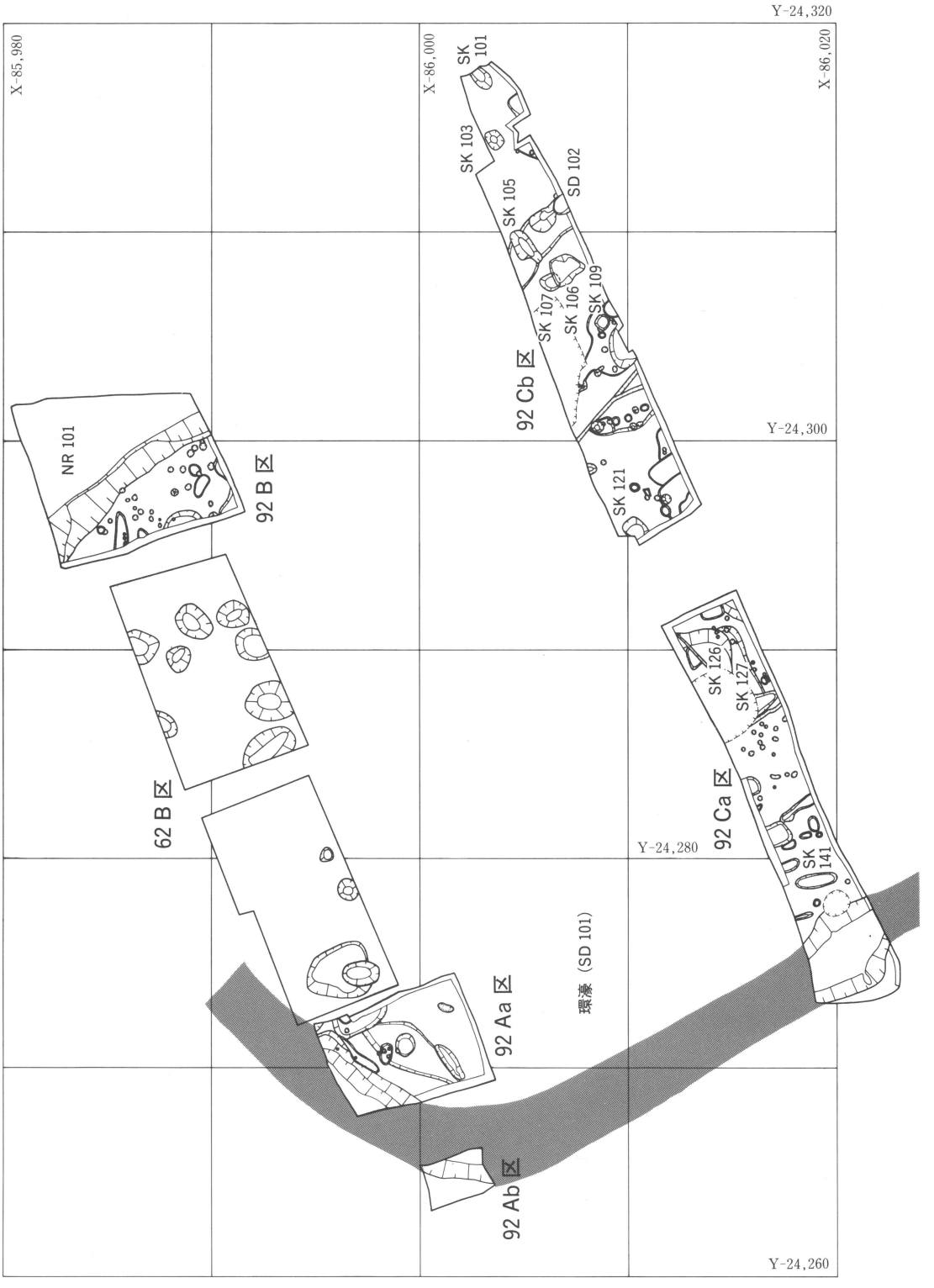
まず、遺跡の範囲がほぼ確定できるようになった。昭和62年度の調査における所見では62Ｂ区より北側が集落の中心にあたると想定されたが、今回の調査により、むしろ南側の92Ｃ区が遺跡のほぼ中央部である可能性が高くなった。遺跡の推定範囲は東西・南北とも70ｍ前後と考えられる。次に、上面遺構では古墳前期の土器が大量に出土したことである。特にCa区のＳＸ01・02出土土器は廻間Ⅲ式後半の良好な一括資料であり、今後の土器編年の指標となり得る。最期に、下面遺構では弥生前期に属する環濠の検出があげられる。県内でこの時期の環濠がみつかった例は、尾張では高蔵遺跡（名古屋市）、山中遺跡（一宮市）、松河戸遺跡（春日井市）、三河では白石遺跡（豊橋市）などがあるが、月縄手遺跡の環濠はこれらのなかでも特に古い時期に属する。また、遺構出土の良好な土器群がこの時期の土器の研究に役立つこととなろう。　（樋上　昇）



環　濠



ＳＫ141　出土弥生土器



下面遺構図（弥生時代前期）（1：300）

西上免遺跡（にしじょうめん）

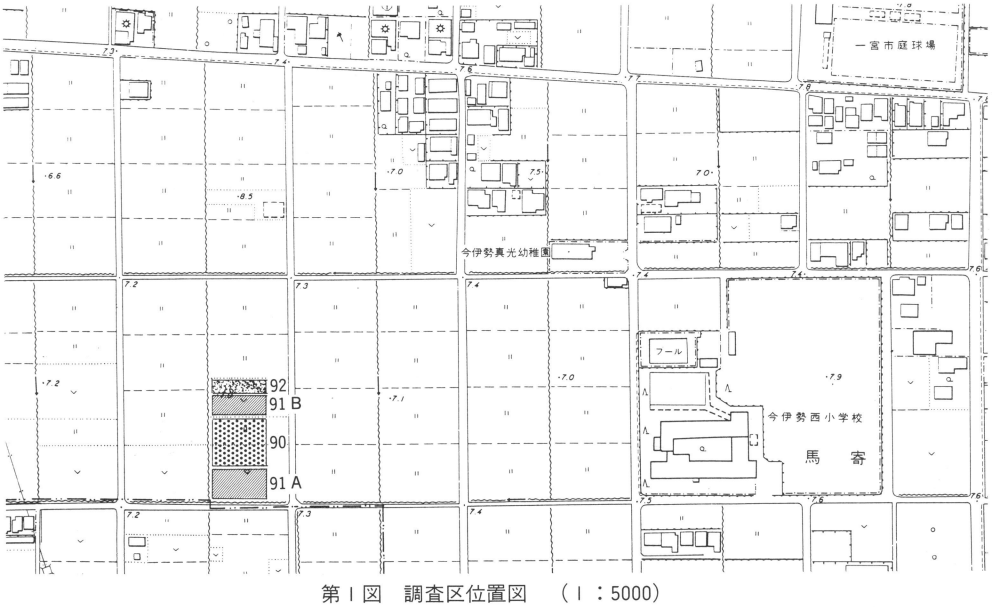
調査の概要

西上免遺跡は弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地（県遺跡番号0701）として登録されている。行政的には一宮市今伊勢町馬寄および尾西市開明に所在する。90年度から調査が行われ、弥生中期から室町時代にかけての溝・土坑などの遺構が検出された。今年度も、1992年4～5月にかけて東海北陸自動車道建設予定地内で実施し、調査区は昨年度調査区の北側260㎡を調査した。

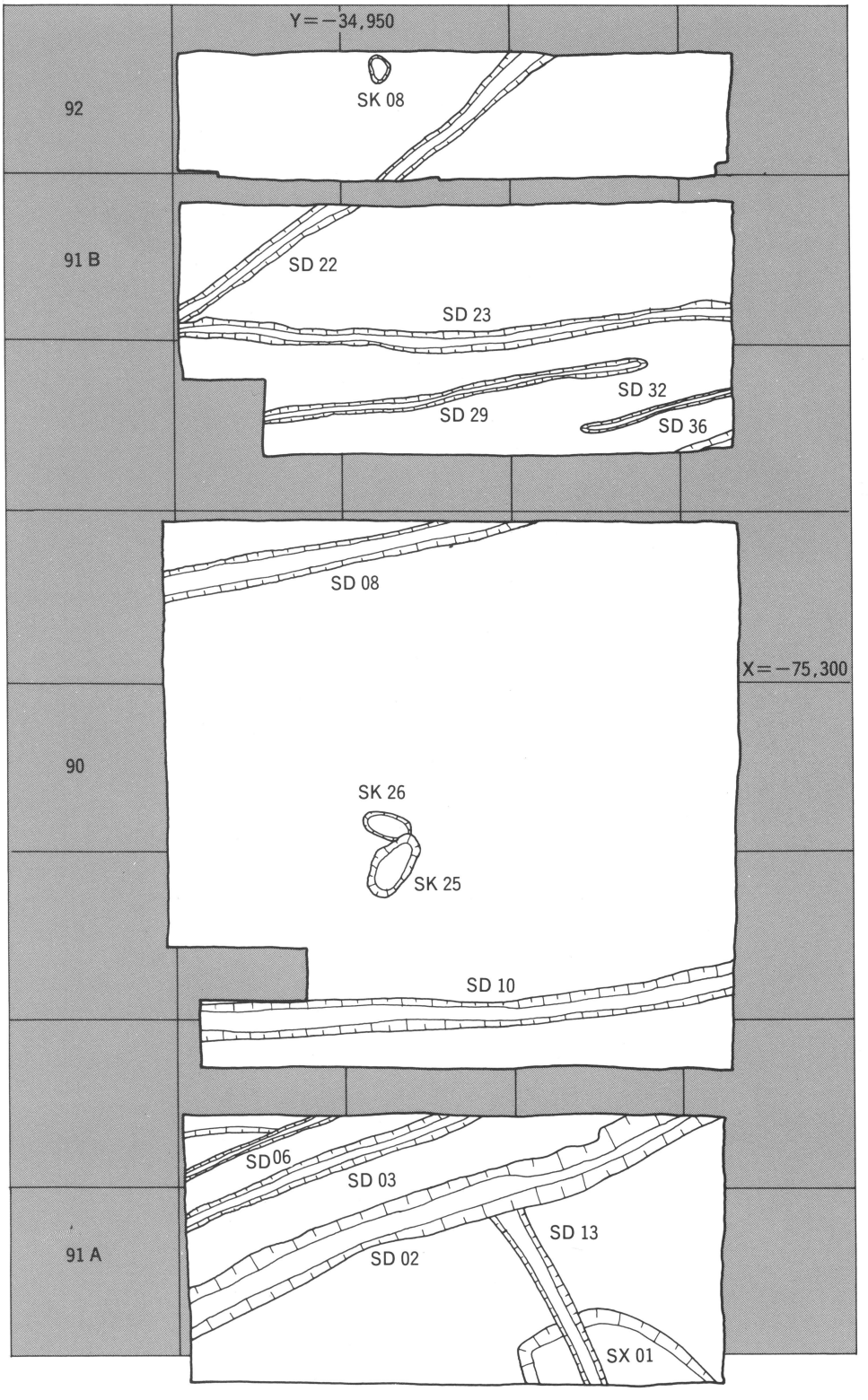
今年度の調査では出土遺物が少なく遺構も希薄で、遺跡の北辺部分に相当すると考えられる。今年度検出された遺構は、北東から南西に走る奈良時代の溝１条、鎌倉時代の溝・土坑が若干、室町時代の土坑７基である。昨年度までの調査では弥生時代中期から古墳初頭にかけての遺構が検出されたが、今年度の調査ではほとんど確認することができなかった。この時期の遺跡の主体は、今年度の調査地点より南方に存在すると考えられる。



（太田芳巳）



第１図　調査区位置図　（１：5000）



第 2 図　弥生～奈良期遺構配置図　（ 1 ：400）

田所（たどころ）遺跡

調査の経過

一宮市大字田所と隣接する葉栗郡木曽川町黒田にまたがる田所遺跡は、木曽川によって形成された自然堤防上および後背湿地に位置している。現況は標高10ｍ前後の水田及び畑地である。

今回、東海北陸自動車道の建設にともなう事前調査を、日本道路公団及び愛知県土木部から愛知県教育委員会をとおした委託により実施した。東海北陸自動車道の建設予定地内には既設の農道が存在するためＡ～Ｈの調査区を設定して調査を行った。調査面積は7150㎡、調査はＡ～Ｄ区を７月から11月、Ｅ～Ｈ区を11月から翌年３月にかけて実施した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、耕作土の下に黄褐色シルト層（江戸期包含層）、その下に天正地震の噴砂に起因する砂層を噛み、さらに暗褐色シルト層（中世包含層）が存在する。この暗褐色シルト層下面が中世および平安時代の遺構検出面にあたる。さらにその下は２層の褐色シルト層（奈良期包含層・無遺物層）を経て古墳時代の水田土壌（灰褐色シルト層）に至る。

検出された遺構と遺物は、Ⅰ：弥生時代中期　Ⅱ：古墳時代　Ⅲ：奈良時代　Ⅳ：平安時代　Ⅴ：中世と５期に分けて考えることができる。特に注目すべきことは、①Ａ区の平安時代の住居跡群の土坑から「富壽神寶」が出土したこと、②幅８～10ｍの南北方向に走る中世の大溝がＣ区・Ｄ区を貫き、しかもＥ区とＨ区で東西方向に屈曲し旧集落を囲むと推測されること、③Ｇ区で墳墓堂、Ａ区・Ｄ区で古墳時代の水田跡が検出されたことである。

（太田芳巳）

Ａ・Ｃ・Ｄ・Ｈ区

遺構　Ⅰ期に関しては、明瞭な遺構は確認することはできなかった。

Ⅱ期の遺構としては水田跡がある。水田跡はＡ区よりＤ区にかけて検出され、調査区周辺に広範囲にわたって展開している可能性が考えられる。いずれも畦畔によって明確に区画されており、一区画は、東西３～４ｍ・南北５～７ｍと小規模であり、やや南北方向に細長く延びる長方形状および不定形の平面形態を呈している。耕作土等から出土した遺物より、古墳時代後期を中心とした水田跡と考えられよう。また、畦畔上に掘削された土坑（ＳＫ114）より石製有孔円板が出土しており、水田との関連が注目される。

Ⅲ期の遺跡は、Ａ区において奈良末期に属すると考えられる竪穴住居を15軒確認した。多くが重複して検出されており、また、出土遺物も少なく不明な部分が多いが、いずれも



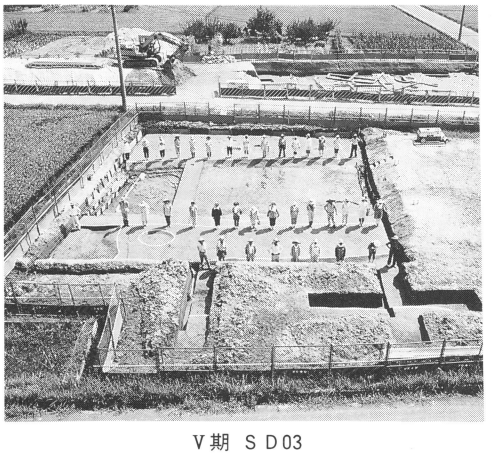
第Ⅰ図　調査区位置図とＳＤ03推定図（Ⅰ：5000）

一辺５ｍ前後の方形プランを呈するものである。

Ⅳ期は、今回の調査中最も遺構の残存状況が良好であり、竪穴住居をはじめとした数多くの遺構・遺物を確認することができた。竪穴住居は重複する形で14軒検出され、時期的には出土した灰釉陶器の年代観より、黒笹90号窯～折戸53号窯式に比定されると考えられる。いずれも一辺が５～６ｍ程度の規模であり、方形状のプランを呈する。住居の内部構造に関しては判然としない部分もあるが、壁面近辺で石・焼土・土師器甕がセットとなる「かまど」状の遺構が認められる住居を４棟確認することができた。また、竪穴住居の周辺には土坑・柱穴群が点在しており、ＳＫ03からは黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器とともに残存状況は不良であるが皇朝十二銭の一つ「富壽神寶」が３枚出土した。

Ⅴ期の遺構として注目されるのは、幅８～10ｍを測るＳＤ03の存在であり、Ｅ区およびＨ区の状況より、400ｍ四方にわたって展開し、中世期の田所集落を取り囲む可能性が考えられる。

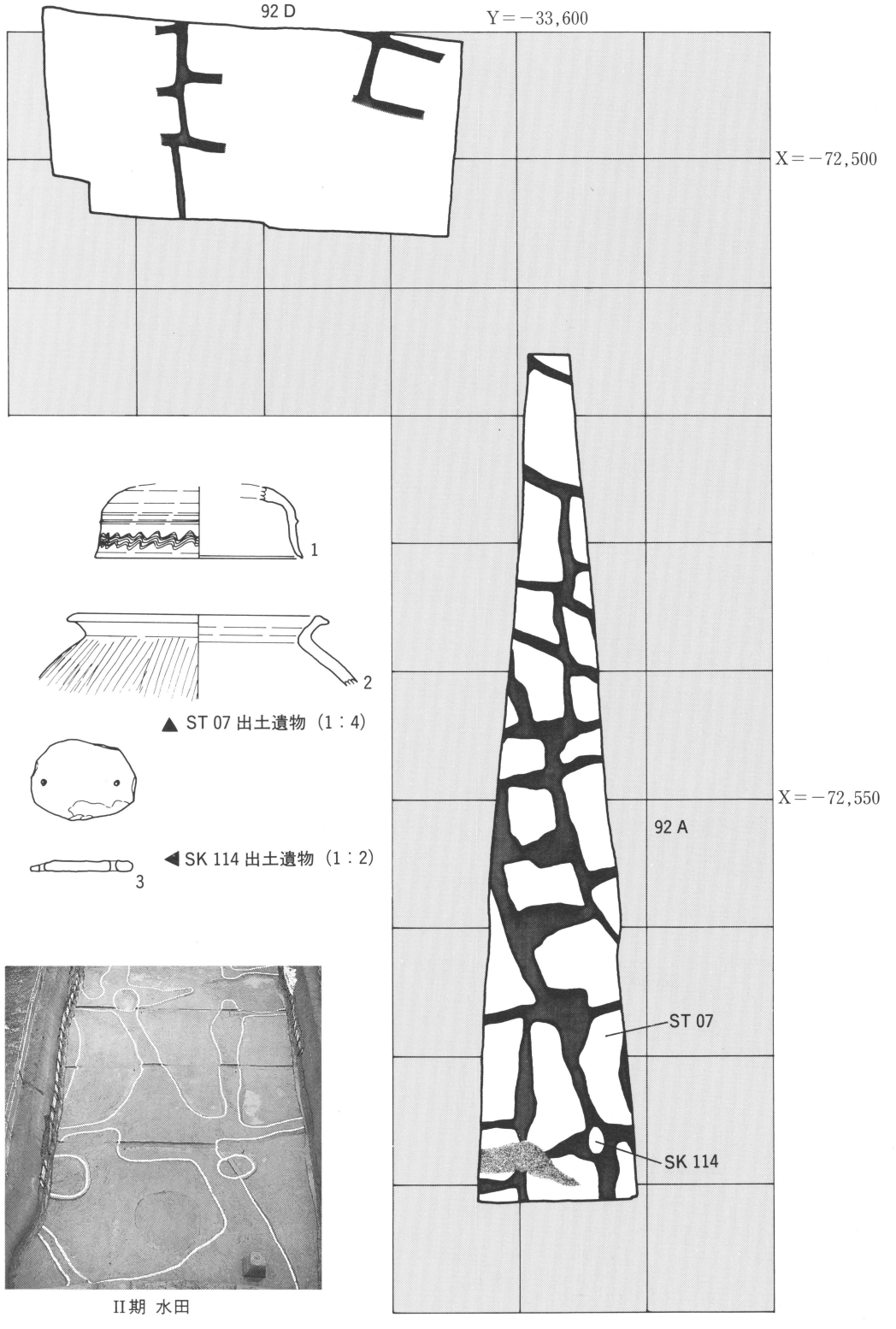
遺物　図示したのはＳＢ12およびＳＫ03出土資料であり、前者からは折戸53号窯式に並行する一括資料が、後者からは黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器とともに「富壽神寶」が出土している。「富壽神寶」は、「和銅開珎」より数え５番目に鋳造された皇朝銭であり、818年より834年にかけて10万貫文（１億枚）が発行されたとされる。愛知県内においては、かつて渥美郡渥美町貝の浜貝塚において１例採集された報告があり、田所遺跡出土例は２例目のものとなる。しかし、田所遺跡出土例は、発掘調査による出土品であり、黒笹90号窯式に比定される灰釉陶器と共伴している点が重要である。貨幣は鋳造→流通→廃棄までにある程度の時間差を考慮せねばならないものの、共伴遺物の絶対年代を推定する物差しとしての役割を果たすものである。今回、田所遺跡より出土した「富壽神寶」は、灰釉陶器の年代観を考える上で貴重な手がかりを与えてくれるものといえよう。　（服部信博）



Ⅴ期　ＳＤ03

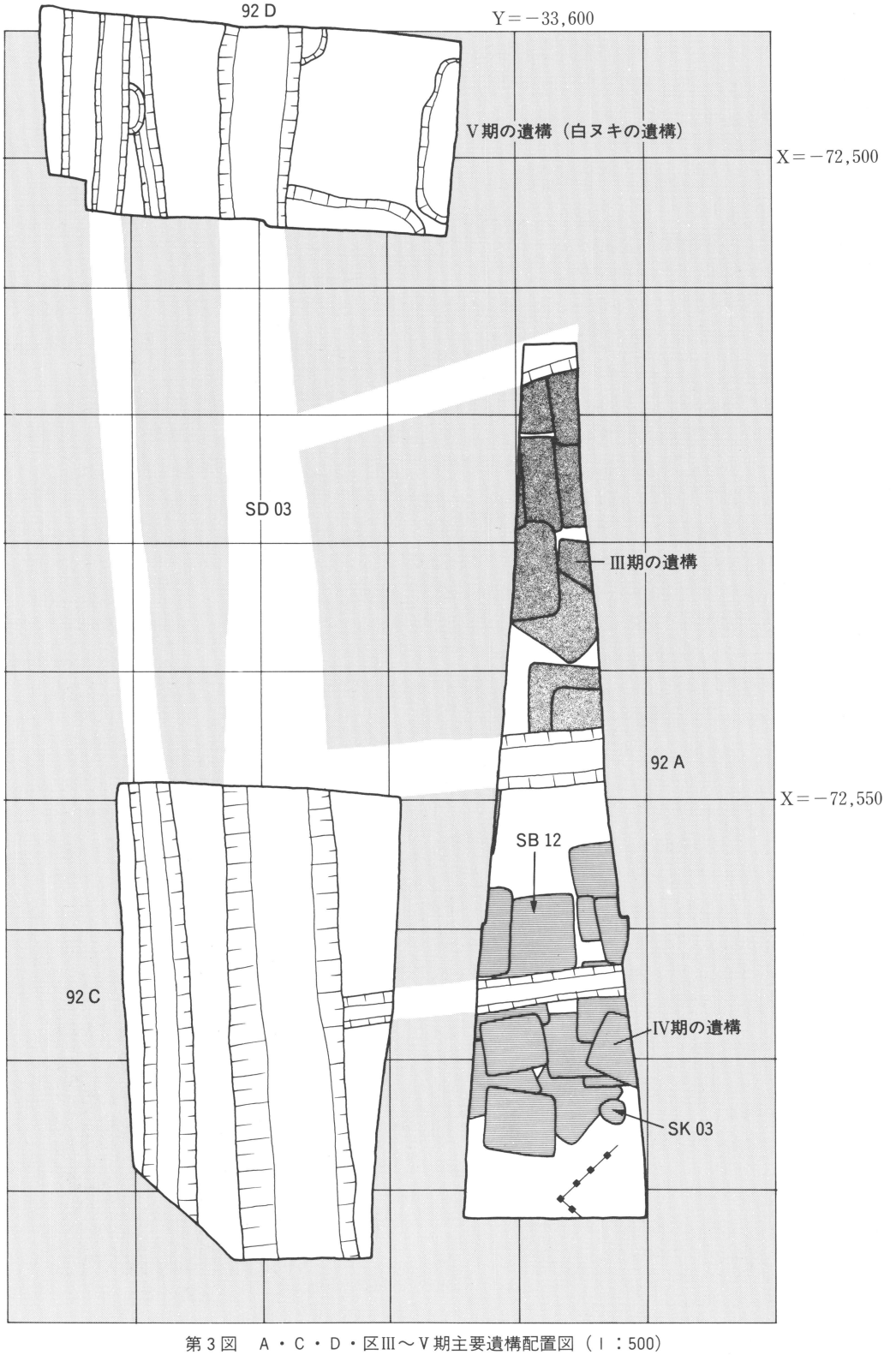


Ⅵ期　竪穴住居群

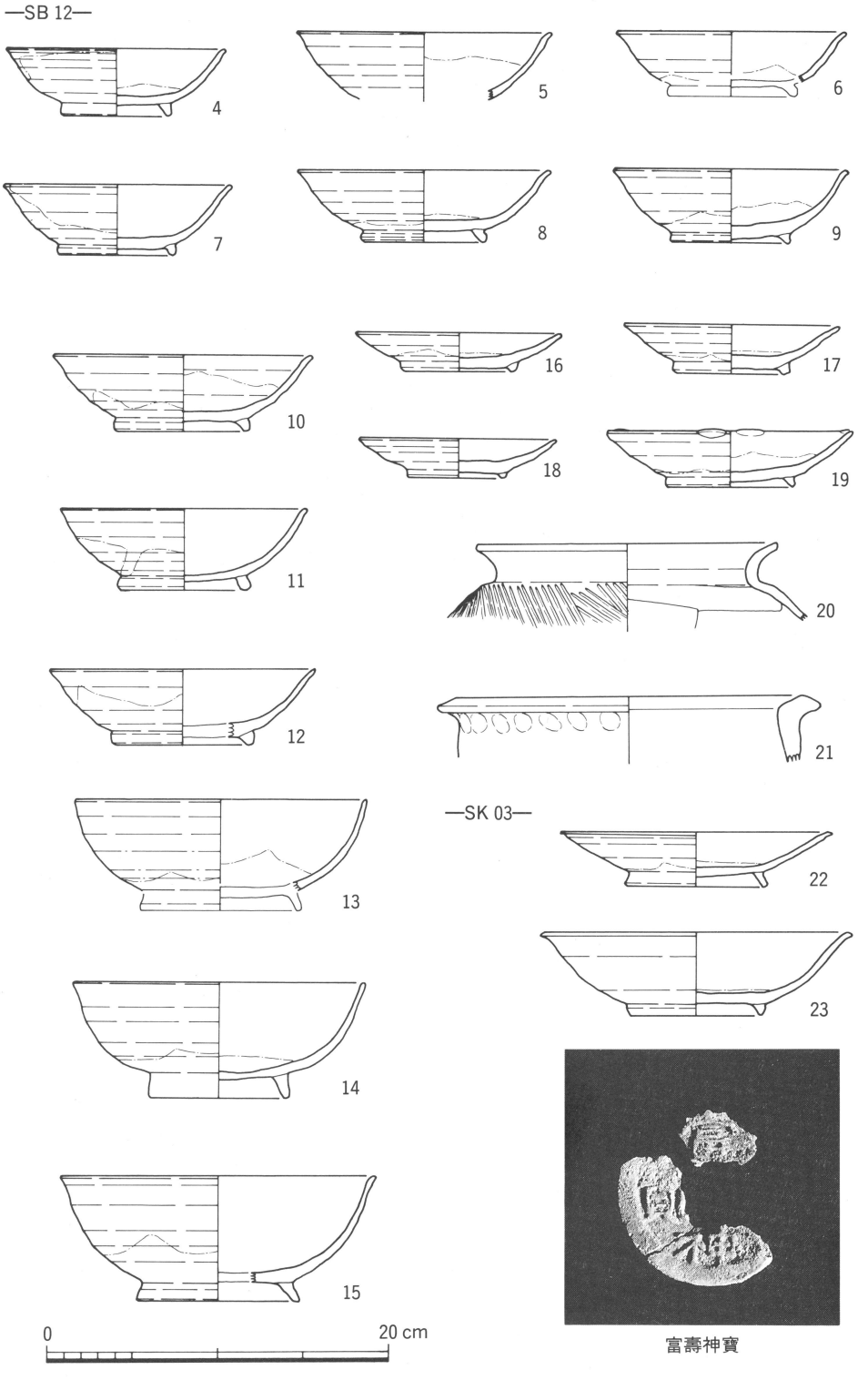


II期 水田

第２図　Ａ・Ｄ区II期主要遺構配置図（Ｉ：500）



第３図　A・C・D・区III～V期主要遺構配置図（１：500）



第 4 図　Ⅳ期出土遺物（ｌ：４）

E・F・G区

F・G区は本年度調査地点としては最も北に位置する調査区である。周辺の現状は水田地帯であるが、表土を除去するとただちに黒色土となり、その下部には砂層が堆積する。ところがF・G区の南に位置するE区では、シルト層が数層にわたって堆積し、2層以上の水田面が確認できている。したがって遺跡立地においてはE区から徐々に北に向かって微高地状の高まり（木曽川左岸の自然堤防）が展開していくことが確認できる。

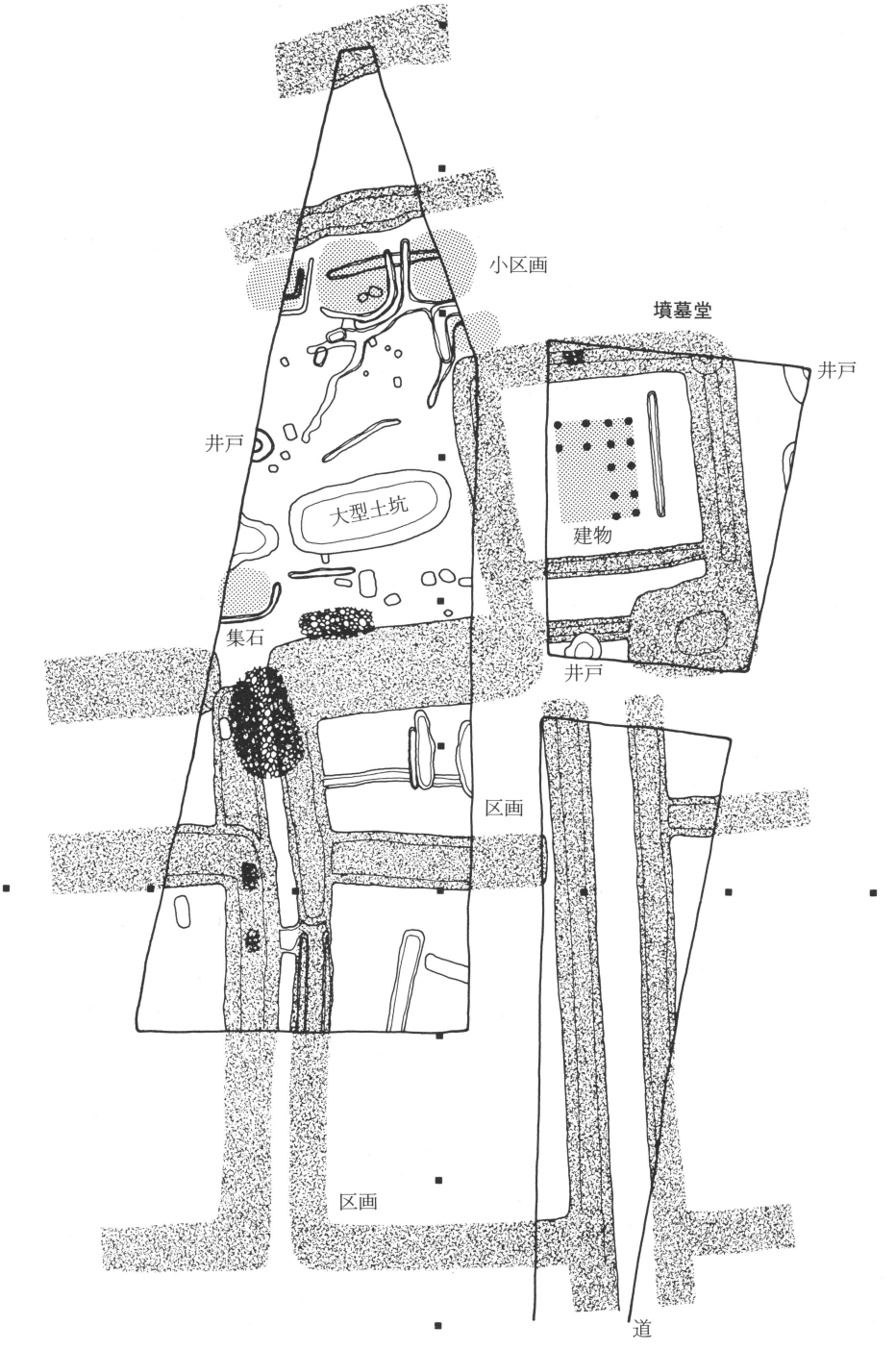
さてF・G区では黒色土上位で溝及び土坑群が検出され、遺構内からは13世紀～14世紀にかけての遺物が出土している。これらの遺構群は幅5mほどの溝によって20m前後の方形区画群を形成するようである。その内の最も注目される地点は、G区北側に存在するSD26・27・28（溝幅約6mで深さ0.8m）によって構成された区画である。平坦部の幅が東西約13m、南北15mを測り、溝で囲まれた内部には総柱の掘立柱建物1棟が存在する。南側には入口部と考えられる開口部が存在し、その西側には井戸が築かれている。中央部に存在する建物は、東西3間（約5m）、南北4間（約6.5m）で一部には柱根が残存していた。周囲の溝からは灰釉系（東濃系）陶器・伊勢型鍋・土師皿に混じって四耳壺・水注片等が出土している。14世紀に所属する資料が多いが、12世紀代まで遡る資料も散見できる。これら溝・建物等によって組合わされた遺構群は、出土遺物から墓に関係する施設と考えることができ、「墳墓堂」と推定できよう。するとF・G区周辺は墳墓堂を中心に方形区画が周囲に広く展開し、中世期の墓域を構成していたことになる。　　（赤塚次郎）



墳墓堂と墓域



墳墓堂全景



第5図　F・G区Ⅴ期遺構配置図（Ⅰ：500）

自然科学分析

ここでは今年度田所遺跡で見られた自然科学的特徴について、噴砂・堆積・生物遺体の順に述べる。

噴砂　田所遺跡ではどの調査区でも少なからず噴砂を確認することができた。

A区、C区、D区で見られる噴砂の特徴として、第6図や写真Aのように噴砂を起こした砂層とその上位の粘土またはシルト層との境界（層理面）は不連続で、凸凹が見られる点があげられる。また、噴砂層の上に堆積する粘土層がブロック状に砂層中に取り込まれている。この事実は噴砂とそれに伴う液状化によるものと考えられる。また、一部で噴砂が粘土層を貫いているのも確認された。

Ab区最下面では、古墳時代の水田の畦畔を貫いて細粒～中粒砂からなる噴砂が厚さ約10cmで覆っていた。

H区では幅数mm～1cm、最大2cmで直線状の噴砂が多数確認された。それらはおおよそN20°～30°WとN20°～60°Eの2方向を示す。また、SD40を埋積した砂を供給源として、噴砂が上位の粘土層を貫いているのも見られる。噴砂に伴う砂の淘汰作用も確認でき、下位で中粒砂、上位に向かい細粒～極細粒砂に漸移している様子が観察された。

堆積　C区、D区において幅約8mの溝が南北方向に1条確認された。ともに細粒～中粒の砂によって埋積されており、シルトや粘土の挟みは見られない。また、砂層中には葉理が発達しており、それより得られる古流向は北から南への流れを示している。

Gb区では、南北方向の溝1条が確認され、細粒から中粒の砂によって埋積されていた。ここでも葉理の発達は良好であり、古流向は北から南を示す。

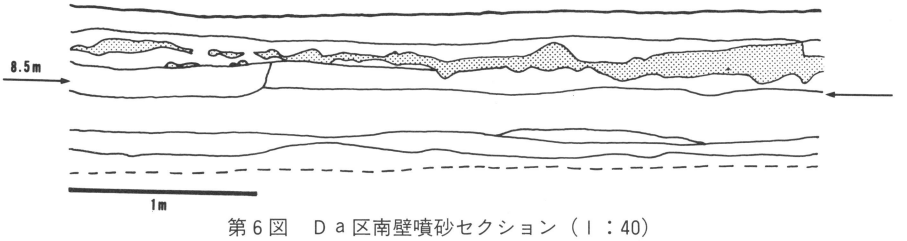
H区では東西方向に幅約15mの溝（SD03の延長）が1条確認された。溝の方向はN65°Eである。細粒砂によって埋積され、トラフ型斜交層理が見られる。斜交層理は約10cmの厚さをもって1セットをなす。層理面には植物片が含まれるときもある。層理内にはフォアセット葉理が顕著に発達し、厚さ1mm程度の赤褐色を呈する砂鉄層によって識別される（写真B）。フォアセット葉理は直線的であり、傾斜角はおよそ20°で一定している。また、底置層に鋭角的に接している。フォアセットの上部と基部とで堆積物の粒度にほとんど変化はなく、1つのフォアセット内で堆積物の粒度の級化構造は認められない。なお、砂層内にはシルトや粘土の挟みは見られない。フォアセット葉理からは古流向が得られ、東から西ないしは北東から南東への流れが推定される。

昆虫遺体と植物遺体　Gb区において、SD26およびSD27を埋積する細粒～中粒砂混じりの黒色粘土層より、大量の昆虫遺体と若干の植物遺体を採集した。

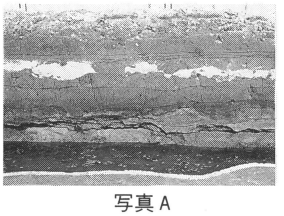
昆虫遺体は甲虫類の翅鞘および前胸背板が採集でき、中でも緑色を呈し、光沢を有する

翅鞘がその大半を占める。また、植物遺体としてはモモに類似した種子が数十点産出している。昆虫および植物遺体とも詳細な分析をまだ行なっておらず、今後の課題である。

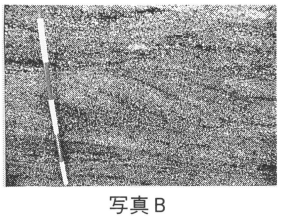
なお、Ｇｂ区のＳＤ26、ＳＤ27からは昆虫および植物遺体とともに、Ⅴ期に比定される砥石や土器等の遺物も出土している。生物遺体と遺物とが同時に産出しているのはＳＤ26、ＳＤ27のみであり、両者の関連性が興味深い。（鬼頭　剛）



第６図　Ｄａ区南壁噴砂セクション（Ⅰ：40）



写真Ａ



写真Ｂ

まとめ

今回の調査によって下記の成果が得られた。

１．Ｆ・Ｇ区では鎌倉時代を中心とする「墳墓堂」と方形区画を構成する墓域を確認することができ、中世期の墓制を考える上で重要な資料を提示できた。特に墳墓堂は東海地域初例であり、全国的にも栃木県下古館遺跡等類例がとぼしく、大変貴重な発見となった。

２．Ａ区では平安時代の竪穴住居が14棟検出され、黒笹90号窯式～折戸53号窯式にかけてのまとまった資料を得ることができた。特に９世紀後半を中心とする遺構が多く、その中にはＳＫ03のような「富壽神寶」を伴なうものも認められた。なお当地区は葉栗郡大毛郷推定地に位置するところからこれらとの関係が今後の課題であろう。

３．Ｃ・Ｄ・Ｈ区では鎌倉時代を中心とする大溝・土坑・柱穴等が見つかり、特に幅８～10ｍの大溝はＥ区南端からＣ・Ｄ区、さらにＨ区にかけてほぼ南北に掘削されている可能性が高く、今後の調査によっては田所集落を囲むような中世期の環濠を想定することができる。なお、Ａ・Ｄ区周辺では下層より古墳時代中期から後期にかけての水田跡も確認されている。（赤塚次郎）

東海北陸自動車道試掘調査

東海北陸自動車道建設予定地内の（仮称）光明寺Ｂ遺跡、田所遺跡、大毛遺跡、（仮称）馬寄遺跡、（仮称）林野遺跡における遺跡の有無およびその範囲の確認を目的として試掘調査を行った。調査期間および調査面積は下の表のとおりである。

（仮称）**光明寺Ｂ遺跡**（一宮市大字光明寺）T.２は畑地に、それ以外は水田に設定し、４地点の調査を行った。T.３の表土下60cmほどの砂層内より灰釉系陶器が出土した以外はほとんど遺物は出土せず、明確な遺構も確認できなかった。

田所遺跡（一宮市大字田所、葉栗郡木曽川町大字黒田）10地点で試掘調査を行った。県道木曽川停車場線以北では、最北のT.８を除いて古墳時代初頭の明確な遺構の広がりを推定できた。なかには弥生時代中期まで遡るものも含まれていた。県道木曽川停車場線以南、国道22号にかけては古代・中世の包含層が確認できた。したがって調査地点の両端T.６・８以外は建設予定地内のほとんどが遺跡であると考えられる。

大毛遺跡（一宮市大字大毛）15地点で調査を行った。国道22号の西側では、T.４・11・12を除いて奈良時代から鎌倉時代の遺構を確認できた。インターチェンジ建設予定地の中心部以外はほぼ全域が遺跡と考えられる。国道22号の東側ではT.２で遺構が検出できず遺物が少なかったものの、周辺の調査の結果、ほぼ全域が遺跡と推定できた。

（仮称）**馬寄遺跡**（一宮市今伊勢町馬寄）７か所すべて水田に設定して調査を行った。堆積状況は耕作土の下に２～３層の粘土を挟み灰緑色シルト層であった。出土遺物もきわめて少なく明確な遺構も検出できなかった。

（仮称）**林野遺跡**（一宮市萩原町林野・大和町北高井・大和町苅安賀）ジャンクションの建設予定地の東半部分について９か所で調査を行った。一部のトレンチで土坑等の遺構を検出できただけで、出土遺物も少なかった。

遺跡名	調査期間	調査面積	遺跡名	調査期間	調査面積
田所	4/14～17	20㎡	田所	10/6～9	40㎡
大毛	4/20～22	30㎡	馬寄	10/12～13	70㎡
光明寺Ｂ	4/23～27	40㎡	大毛	12/9～10	50㎡
田所	5/25～28	40㎡	林野	3/15～18	90㎡
大毛	6/1～10	70㎡			


(仮称)光明寺B遺跡
田所遺跡
大毛遺跡
(仮称)馬寄遺跡
木曽川
新木曽川大橋
サイクリング道路
光明寺
極楽寺
笠田町
北山町
渡町
大日
中屋敷
千渡
北方
北方町
狐塚
北曽根
曽根
東敷
奥村
北山
黒田
曽川町
内割田
外割田
木曽川町
福塚
門間
馬寄
吉田
向神田
今伊勢町
日久井
本神戸
小栗町
北神明町
佐千原
葉栗富塚
高田
島村
笹野
車屋敷
杉山
葉栗大毛
宮後
宮市

下水道浄化センター試掘調査

中島郡平和町須ケ谷および稲沢市一色町、儀長町に建設予定の下水道浄化センター用地内において、一色青海遺跡の範囲確認調査を行った。調査は92年５月と93年１月に24地点で実施した。

５月の調査では、１～14の地点の試掘調査を行った。その結果、下水道浄化センター予定地の北端の微高地において弥生時代中期の包含層を含め、良好な遺構検出面を確認することができた。とくに13・14では土坑・溝、住居跡と推定される遺構が検出されるとともに多量の弥生土器が出土した。９～14においては湧水のため明確な状況は把握しにくかったが、中世以降の水田開発に関与するもので豊富な遺構の広がりは推定できなかった。

１月の調査では15～24の地点の試掘調査を行った。調査の結果、現在の畑部分はすべて客土であるが、水田面まで掘り下げると遺構が検出できた。弥生時代中期の土器を中心に遺物の出土量も多く、磨製石斧も２点出土している。したがって建設予定地の北側部分にはきわめて良好な弥生時代の遺跡があると推測される。　　（太田芳巳）



１～14は５月試掘地点　　15～24は１月試掘地点

伊保（いぼ）遺跡

調査の概要

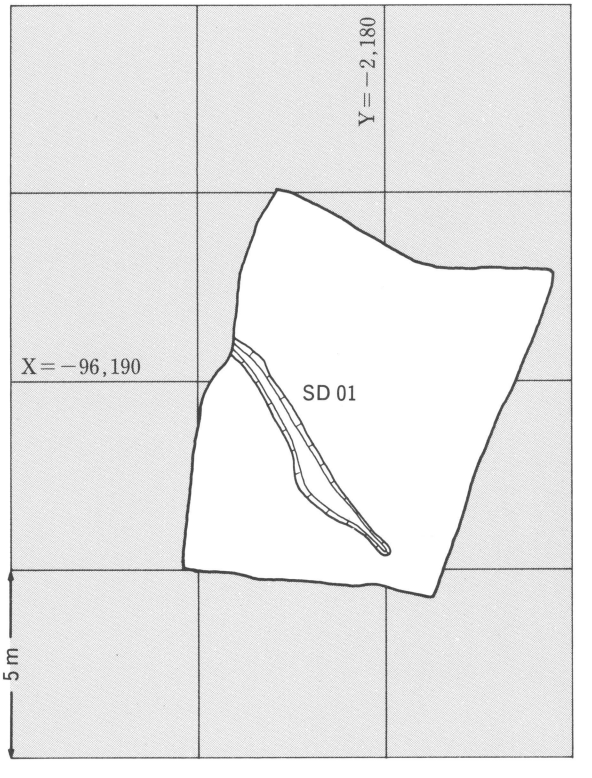
伊保遺跡は豊田市保見町、東保見町に所在する。猿投山から南方にのびる舌状を呈する洪積台地の南端に東西に細長く立地する。昭和44年に猿投遺跡調査会により本遺跡の発掘調査が初めて行われ、弥生時代後期～古墳時代、奈良・平安時代の遺構・遺物が検出された。今回の当センターによる発掘調査は、県道加納・東保見線建設に伴う事前調査であり、平成２年度より継続して実施してきた。昨年度までの調査においては、先土器～鎌倉時代の遺構・遺物が確認されている。

今年度は１調査区のみ調査を行った。面積は500㎡である。厚さ２～３ｍの現代の攪乱層の下に河川成の粗粒～中粒砂が堆積している。その砂層を掘り込んで、北西から南東方向に中粒砂で埋積された幅約50cm、深さ約20cmの灰釉系陶器を含む溝を１条検出した。

（鬼頭　剛）



調査区位置図（１：10000）



遺構図（１：200）

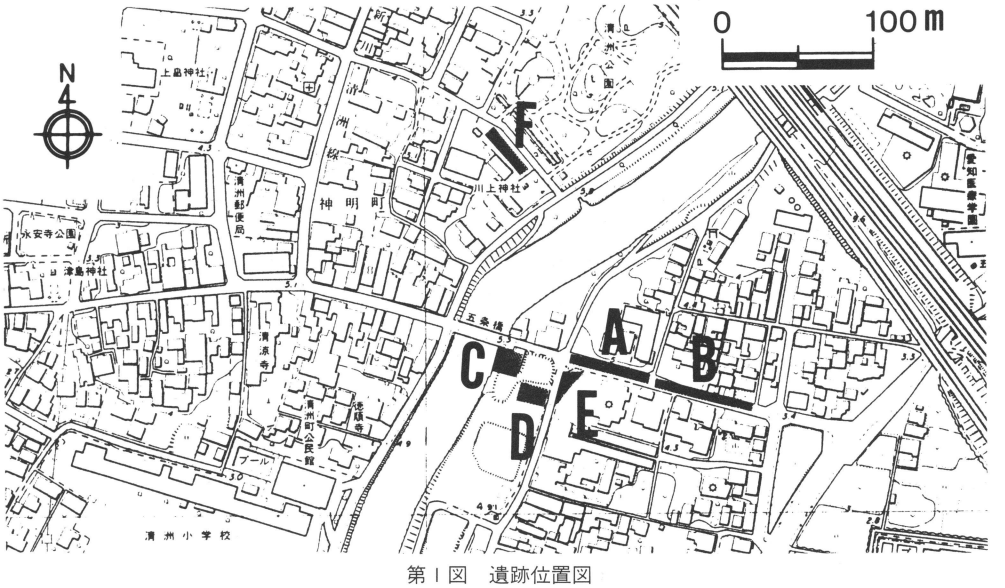
清洲城下町遺跡（きよすじょうかまち）

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川中流域に形成された自然堤防とその後背湿地に立地する古代から近世にかけての複合遺跡であり、行政的には西春日井郡清洲町に所在する。発掘調査は昭和59年から継続されており、今年度は県道新川清洲線拡幅に伴う調査1010㎡（A・B区）と五条川改修に伴う調査900㎡（C・D・E・F区）実施した。

調査の概要

五条川左岸のA～E区のうちB区は自然堤防と後背湿地の変換点に、その他は自然堤防上に立地し、標高は約3.6m～5mである。F区は五条川右岸の後背湿地上に立地し、標高は約3.5mである。基本層序はB区で、表土、にぶい黄褐色シルト層、褐色シルト層、黄褐色粘質シルト層、黄灰色砂層である。調査の結果、A・B区では古代、城下町期、宿場町期の遺構が検出された。調査区が長狭なため遺構の正確なプランは把握できなかったが、奈良時代の一括遺物が出土した住居跡（B区SB01）や城下町前期の良好な一括遺物が出土した土坑（B区SK39）は注目すべき遺構である。またC・D・E・F区でも城下町期、宿場町期の遺構が検出されたが、特にF区では『清須古城絵図』に記載された清須城の内堀が確認され、金箔瓦や人名が刻書された瓦を含む多量の瓦が出土した。その他C・D区では宿場町期の礎石群や井戸の位置から美濃街道沿いの景観の一部を垣間見ることができた。（大竹正吾）



第1図　遺跡位置図

県道新川清洲線関連（A・B区）

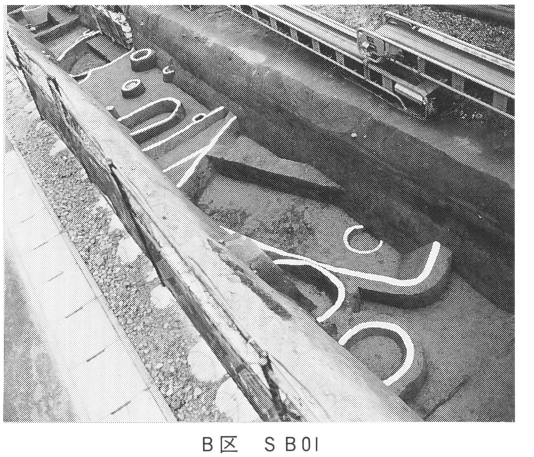
A・B区は県道拡幅にともない昨年度と今年度で片側ずつ調査を実施した。調査区は幅5m前後であったが、奈良時代から江戸時代かけての多くの遺構を検出することができた。ここでは紙面の関係でB区で検出されたSK39とSB01について触れることにする。

SK39は調査区の狭さに加え江戸期の土坑にきられているため正確な平面プランは確認し得なかったが、深さは110cmを測る。その埋土は多量の焼土、壁土、炭を含み、火災による焼失家屋の廃材を投棄した土坑であると考えられる。出土遺物（第3・4図）は1・2が天目茶椀。3は李朝の粉青沙器刷毛目茶椀で本遺跡では初例である。4・5・6は縁釉小皿で5・6は内面に朱の痕跡が残る。7～16は土師皿で底部に回転糸切痕を残す。17は灰釉の卸し皿で片口を有する。18は李朝の雑釉徳利。19は縁釉の鉢で胎土は灰白色を呈し窖窯の製品と思われる。20・21は摺鉢。22は内耳鍋。23は香炉。24は鉄釉の蓋。25は小型の灯明具。26・27・28は建水などの茶道具と思われ、26は波状口縁を有する。29は鉄釉四耳壺（茶壺）。30は常滑の甕で体部に鳥と草を線刻しており、N字状折返し口縁が頸部に融着する形状を示す。これらの遺物は大窯Ⅰ期を主体とする良好な一括資料であり、喫茶具が多く、輸入陶器を含む出土遺物の質の高さはこの地に暮らした人の豊かな生活を想像させる。

SB01は一辺が364cm、深さ31cmの竪穴住居で、北西隅に柱穴が確認された。出土遺物はすべて須恵器であり、その器形から猿投窯編年における鳴海32号窯式に属するものと思われる。なおこの時期の遺構は過去の調査結果をみても現五条川沿いの自然堤防上にはなく後背湿地との変換点付近に分布することがわかる。今回の調査でもSB01以西（五条川沿い）に古代の遺構は存在しなかった。



B区全景

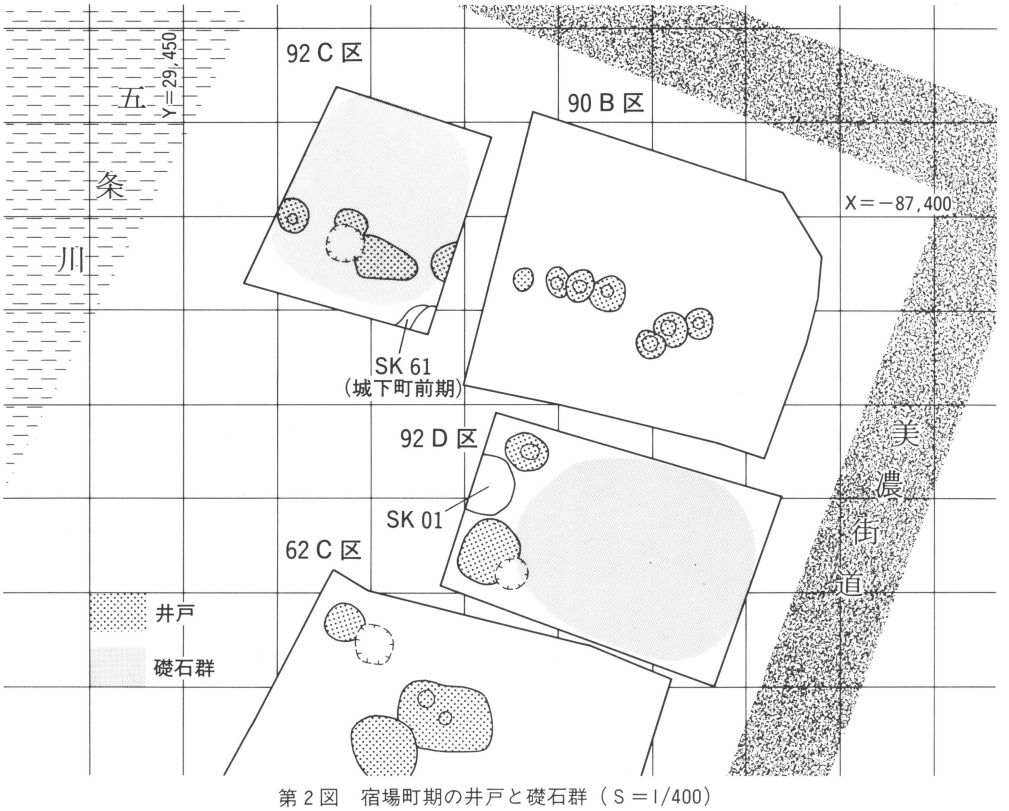


B区　SB01

五条川河川改修関連（C・D・E・F区）

C区　C区は現五条川の東に隣接する。上面で検出された遺構は宿場町期、城下町前期に大別される。宿場町期の遺構としては江戸時代後期の礎石群、井戸、土坑が検出された。江戸（SE04）は最下層に縦板の桶組を2段、その上に常滑産陶製井筒（甕の転用ではなく井戸専用に焼成したもの）を3段積み重ねている。城下町前期の遺構は土坑のみであるが、SK61からは大窯Ⅰ期の良好な一括資料の出土をみた。下面では旧五条川の河川敷が確認されたが、川の埋土から「法故精勤給侍合無所乏尒時世尊欲□宣」（『妙法蓮華経巻第五』の一部）、「□佛南無阿弥陀佛」、「南無阿弥陀佛南□」「□菩提」と記された柿経、卒塔婆、漆椀、漆皿、下駄などの木製品や土師皿が出土した。また木杭列が東西、南北にわたって確認され、川に張り出した桟橋のような施設が想定されるが、詳細については不明の点が多く、過去の調査結果(90B、C、D区のNR01)をふくめて今後の検討課題となろう。

D区　D区は美濃街道の西に隣接する。上面ではC区と同様に宿場町期、城下町前期の遺構が検出された。宿場町期の遺構としては礎石群、井戸、土坑が確認されたが、とりわけSK01からは江戸時代前期の良好な一括資料を得ることができた。またC・D区ともに礎石群と井戸の位置から、美濃街道に面した建物とその裏手に掘られた井戸という宿場町期の景観が想定される。



第2図　宿場町期の井戸と礎石群（S＝1/400）

E区　D区の東、美濃街道をはさんで位置するこの調査区で注目すべきは、標高約３ｍから4.6ｍにかけてみられるシルトと砂の互層である。層の形成は洪水に起因するものと考えられ、その形成過程において幾度か安定した時期があったことがセクションから観察できた。検出された遺構の多くはこの層の形成過程で掘削されたものであり、それらはすべて城下町期に掘削された遺構である。なおＡ・Ｄ区でも同様の堆積が認められることから、城下町期のある期間、この地が非常に不安定な状態にあったことがわかり、江戸期の瀬替え以前、民衆を苦しめた五条川の姿を彷彿とさせる。

F区　五条川右岸の本調査区からは、清須城の内堀が検出された。上層を明治時代以降の用水路と水田によって攪乱されており、調査区全体が堀の中に入っているため、平面プランや深さなど正確なことは確認し得なかったが、調査区内で残存する堀の深さは最深部で80cmあり、西から東に向かって（五条川に向かって）深くなっている。堀の埋土は上層が黒色粘土であり、下層は黒色粘土に砂が混じる。遺物は瓦が中心で、城下町前期の陶器、土師皿も出土している。瓦については軒丸瓦28点（巴文19点、桐文２点、不明７点）、軒平瓦６点（均整唐草文２点、不明４点）、鯱瓦１点、熨斗瓦４点、切隅瓦１点が出土し、軒丸瓦のうち１点は金箔瓦である。なお丸瓦のなかには凸面に「助二□」「孫ヵ介」「二郎四郎」「藤右衛門尉」と刻書されたものがあり注目される。遺物の出土状況で興味深いのは、ほとんどの瓦の出土レベルが黒色粘土層の上層～中層部に限られ、堀の下層部からの出土が少ないことである。このことは堀がある程度埋まった時期に城またはそれに付属する建造物が廃絶したことを示唆しているのではなかろうか。また軒丸瓦と軒平瓦の出土数のアンバランスは瓦の葺き方、廃棄のあり方を含めて今後の検討課題となろう。



Ｅ区洪水性堆積



Ｆ区出土軒丸瓦（左が金箔瓦）

まとめ

今回の調査を過年度の成果も考慮してまとめると次の６点になる。

１．五条川左岸では古代の遺構は自然堤防上になく、ＳＢ01が検出されたＢ区以東の自然堤防と後背湿地の変換点を中心に展開すると思われる。

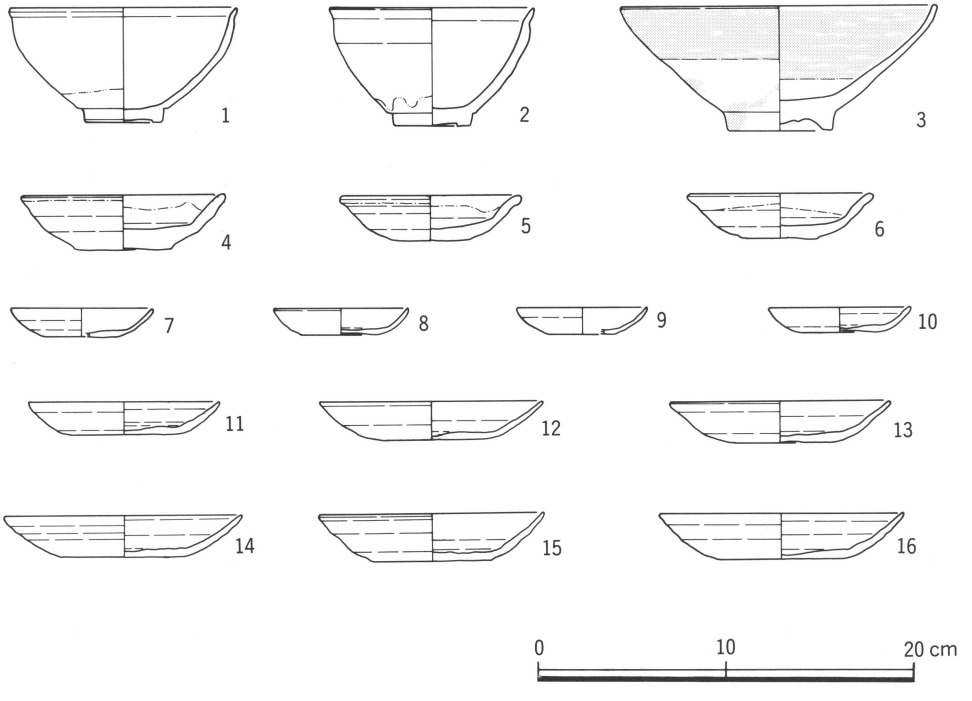
２．五条川左岸のＡ・Ｂ区では古代の包含層と城下町期の包含層のあいだに中世の遺物をわずかに含む約70cmの黄褐色粘質シルト層が確認されたが、中世の遺構は検出し得なかった。中世においては遺跡の中心は後背湿地上にあったと考えられる。

３．Ｂ区のＳＫ39、Ｃ区のＳＫ61から大窯Ⅰ期を主体とする良好な一括資料が出土した。これらの遺構の掘り込み面の標高は約3.8～4.0ｍであることから、この地域では江戸期と城下町前期の生活面の標高に大きな差がみられないことがわかった。

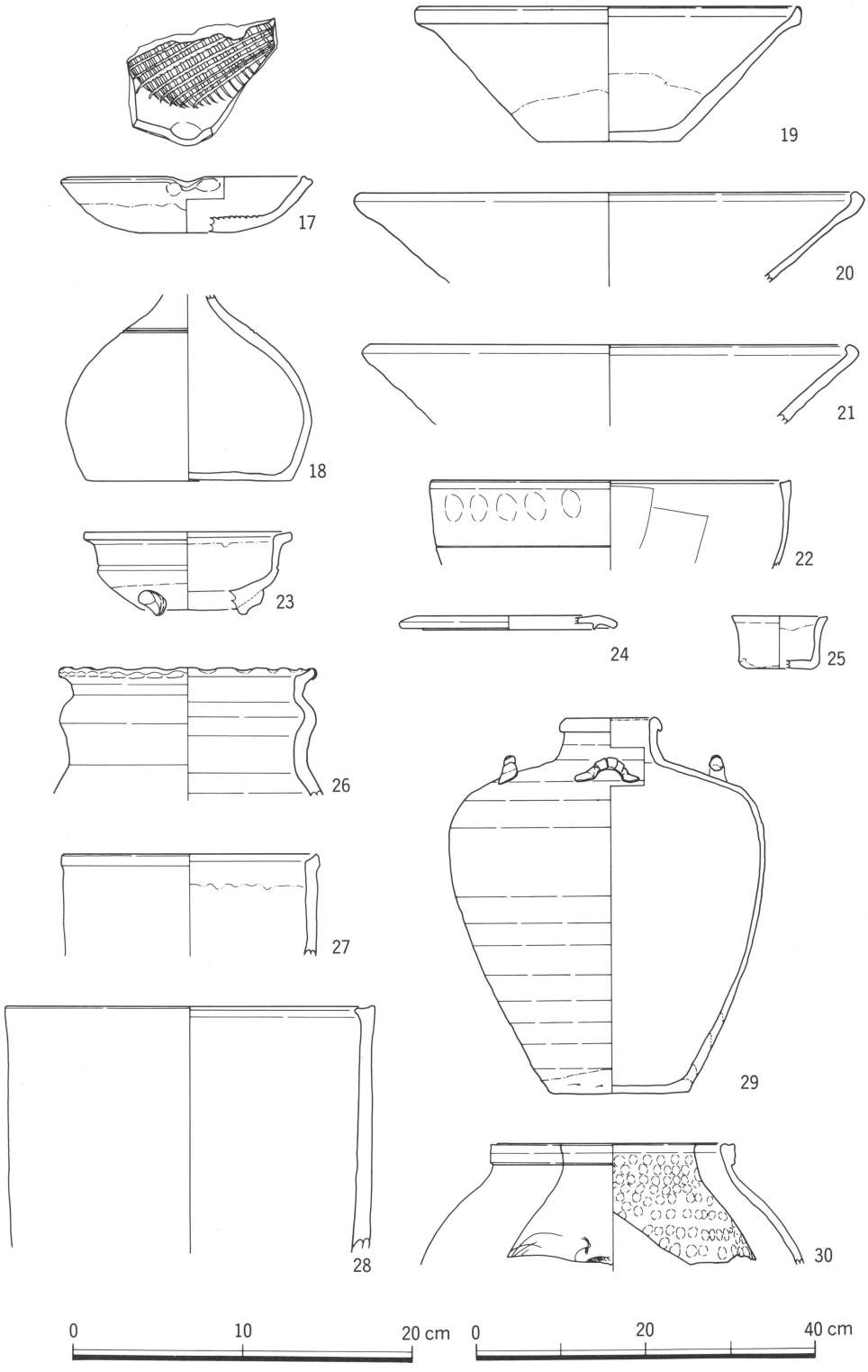
４．Ｃ区の下面では旧五条川の河川敷が確認され、その埋土から城下町前期遺物とともに柿経、卒塔婆、漆椀、下駄などの木製品が出土した。上面で検出されたＳＫ61が大窯Ⅰ期に所属することから、河川敷は前期のなかでも大窯Ⅰ期までに埋まったことになる。

５．Ｅ区では1.6ｍに及ぶ城下町期の洪水性堆積が確認された。

６．五条川右岸のＦ区では、『春日井郡清洲村古城絵図』に記載された清須城の内堀が検出された。金箔を施した軒丸瓦や人名を刻書した丸瓦など貴重な資料を得るとともに、本丸付近においてはじめて城下町前期の遺物群の出土をみた。　　（蟹江吉弘）



第３図　Ｂ区ＳＫ39出土遺物　Ⅰ：４



第4図　B区SK39出土遺物　（17～28　1：4，29・30　1：8）

外町（そとまち）遺跡

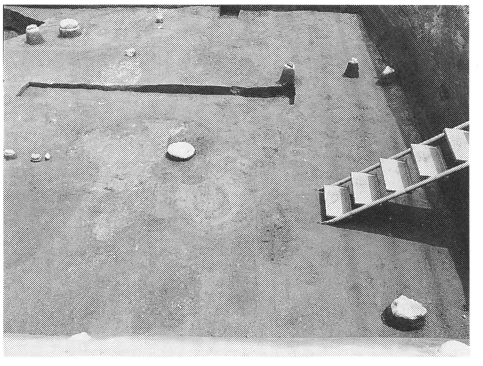
調査の経緯

外町遺跡は、濃尾平野を南流する五条川左岸の標高３ｍ前後の自然堤防上に立地し、行政的には、西春日井郡清洲町・新川町の境界付近に位置する。遺跡は中世以降の美濃街道に面しており、北方に清洲城下町遺跡が広がっている。

今回の発掘調査は、県道新川・甚目寺線建設に伴い、平成３年度に引き続き実施したものである。本年度は、５月から７月まで、680㎡にわたって調査した。

調査は、湧水に悩まされたが、江戸時代後期頃の居住域や田地を確認し、江戸時代前期から中期頃の柱穴群や礎石群を検出した。

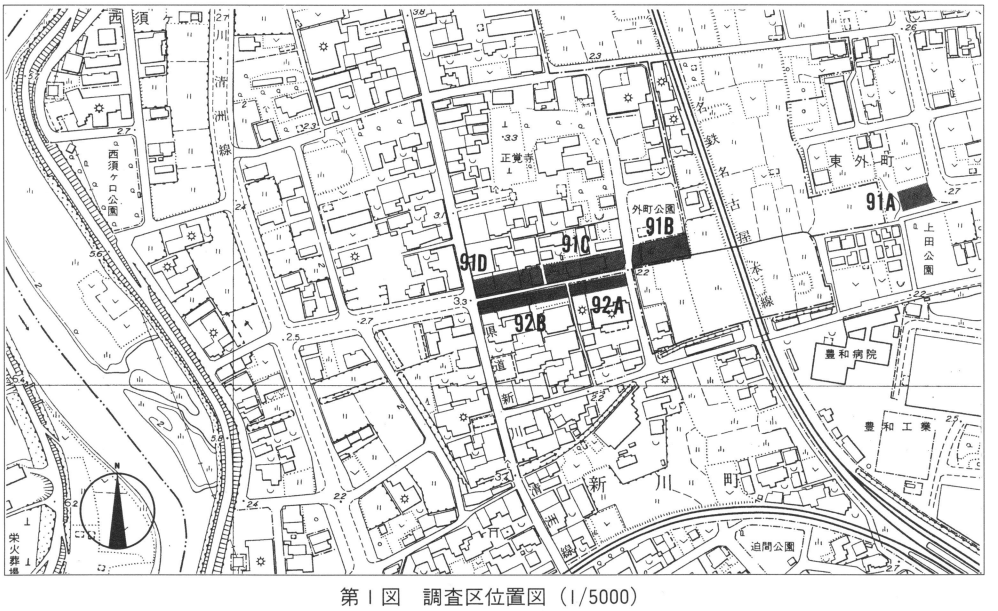
（大竹正吾）



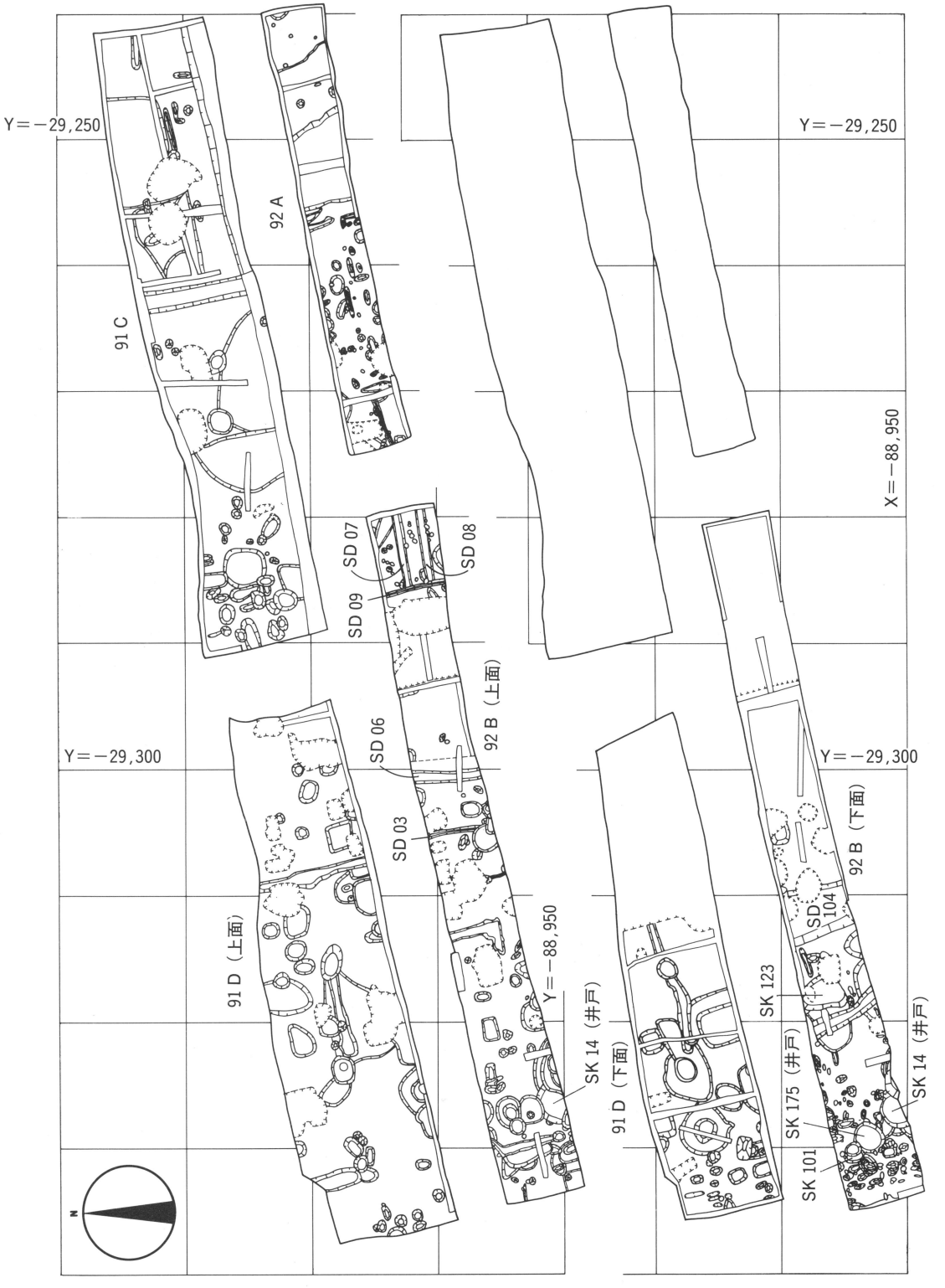
B区下面検出状況



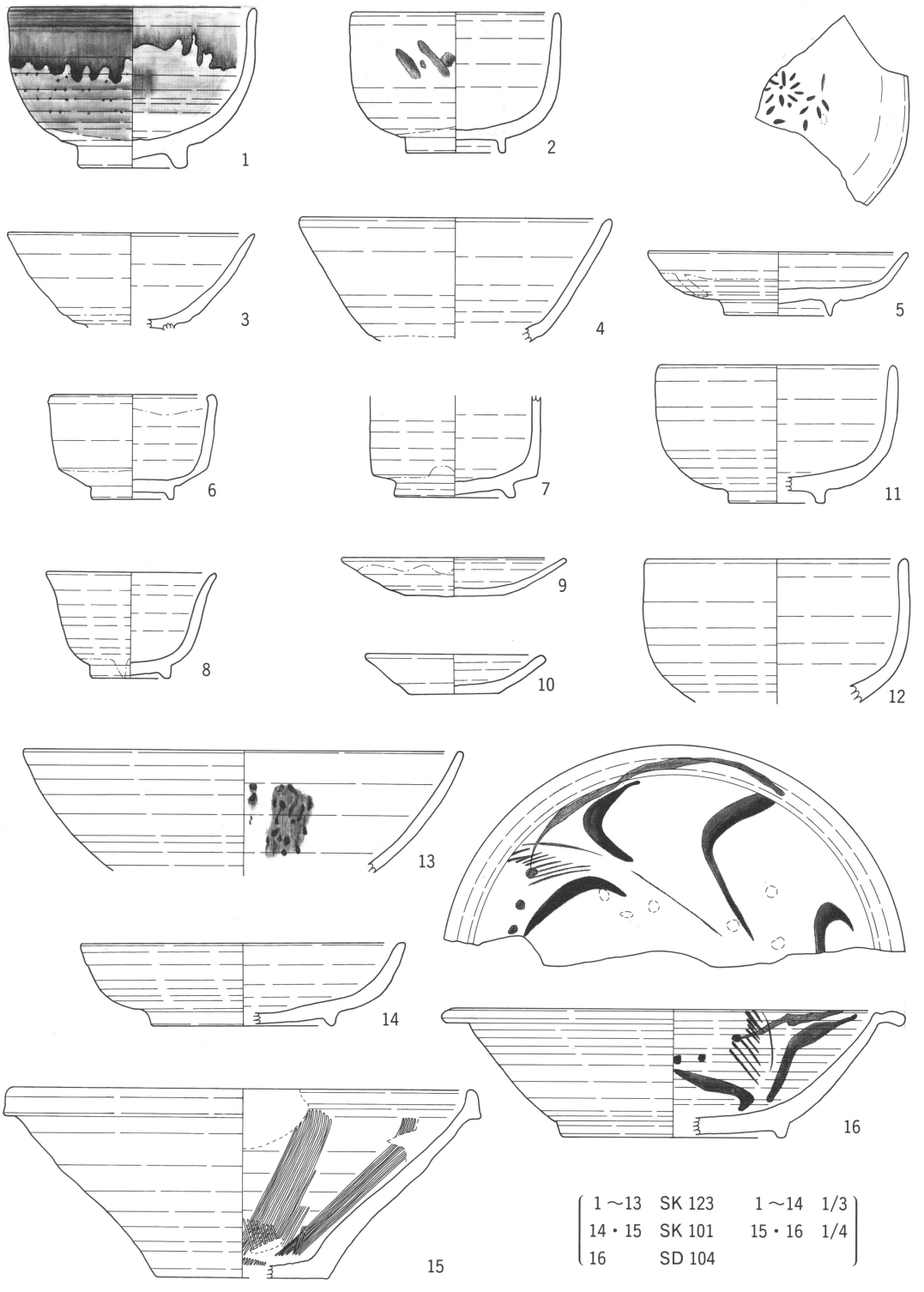
B区下面調査区西半（北より）



第Ⅰ図　調査区位置図（1/5000）



第 2 図　遺構配置図（1/500）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
1～13 SK 123
14・15 SK 101
16 SD 104
1～14 1/3
15・16 1/4

第3図　出土遺物実測図

調査の概要

今年度は、A・B区2つの調査区にわけて調査を行った（第1図）。

遺構（第2図）

A区　表土を剝すと灰白色の砂が、さらにその下から田の床土と思われる灰黒色シルトが現れた。この床土を剝した面で遺構を検出したが、出土遺物がほとんどないため遺構の時期を明確に確認することができなかった。

B区　調査区東半では、A区とほとんど同じ状況であったが、SD07・08で山茶椀の破片が出土していることから、ピットや溝は室町時代頃の遺構と考えられる。調査区西半では、昨年同様2面調査を行った。上面では江戸時代後半の遺構を、下面では江戸時代前期～中期頃の遺構を確認した。特に、下面では、廃棄土坑・井戸などのほか、昨年度の調査では確認されなかった柱穴群や礎石群が検出されており、美濃街道沿いの町屋建物を想定することが可能となった。

遺物（第3図）

出土遺物としては、江戸時代後半を中心とする瀬戸・美濃産の陶磁器類が大多数を占めている。1は尾呂茶椀、2は呉須絵の丸椀、3・4は灰釉の平椀、5は鉄絵（刷絵）の丸皿、6は灰釉の筒型椀、7は灰釉の汁次、8は灰釉の端反椀、9は鉄釉の灯明皿、10は土師皿、11・12は灰釉の丸椀、13は鉄絵の丸鉢（以上SK123）、14は志野の丸皿、15は大窯期で錆釉の擂鉢（以上SK101）、16は笠原鉢（SD104）である。

その他、常滑産の甕・火鉢、在地の内耳鍋・焙烙、肥前磁器である染付の椀・皿類、山茶椀類、多量の瓦などが、包含層や遺構内から出土している。

まとめ

上面においては、昨年度の調査結果と同様、江戸時代後期の町の様子を伺うことができる。91D区と92B区の美濃街道沿いには居住地があり、溝によって区切られていたようである。溝の東側には、畑地や田地が広がっていたようである。今年度の調査区では区画する溝が明確ではないが、SD03かSD06を想定することができる。

また、下面では、江戸時代初頭には人々が住んでいた形跡がみられ、清須城下町の外町として17世紀初頭には町が形成されていたことが明らかになった。さらに、室町時代の遺構の存在から、江戸時代以前にもこの地域に人々が生活していたことが推定される。

最後に、昨年指摘した約1mの盛土が、『清洲町史』にみられる五条川瀬違え（1794）に伴う町割りの再編という人為的な造成ではないかと想定したが、今年度の調査では上面と下面との遺構から出土した遺物の時期差に明確な結果を得ることができなかった。このことは、来年度発行する報告書の中で明らかにしたい。　（小嶋廣也）

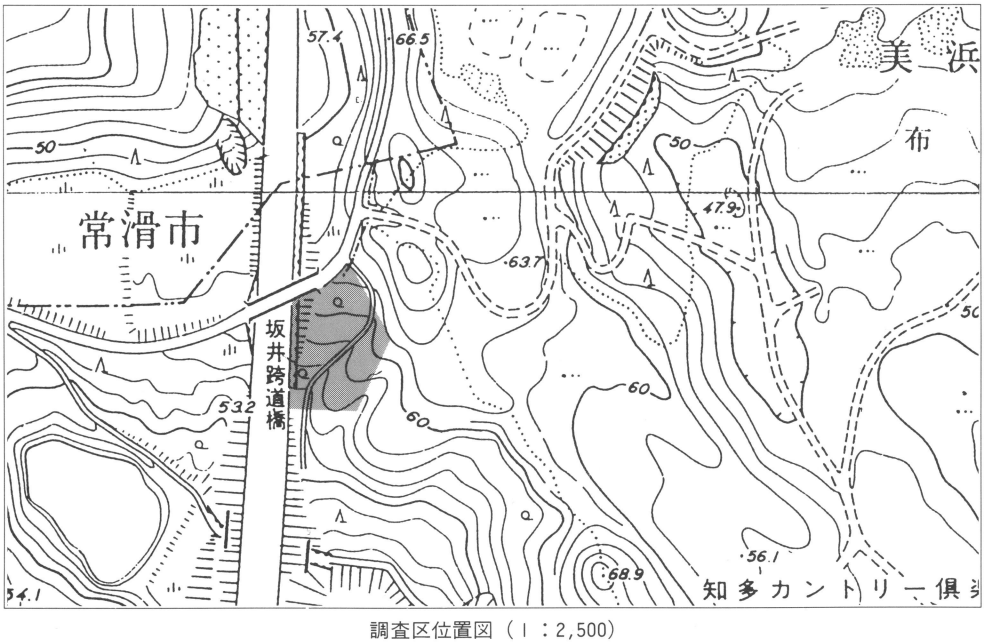
立楠古窯跡

調査の経過　立楠古窯跡は知多半島の南部、知多郡美浜町大字布土地内に所在している。平安時代末期から室町時代に知多半島の丘陵上に数多く築かれた灰釉系陶器の古窯跡群の一つである。知多中央道拡幅にともない、600㎡の面積で調査をおこなった。(鷲見　豊)

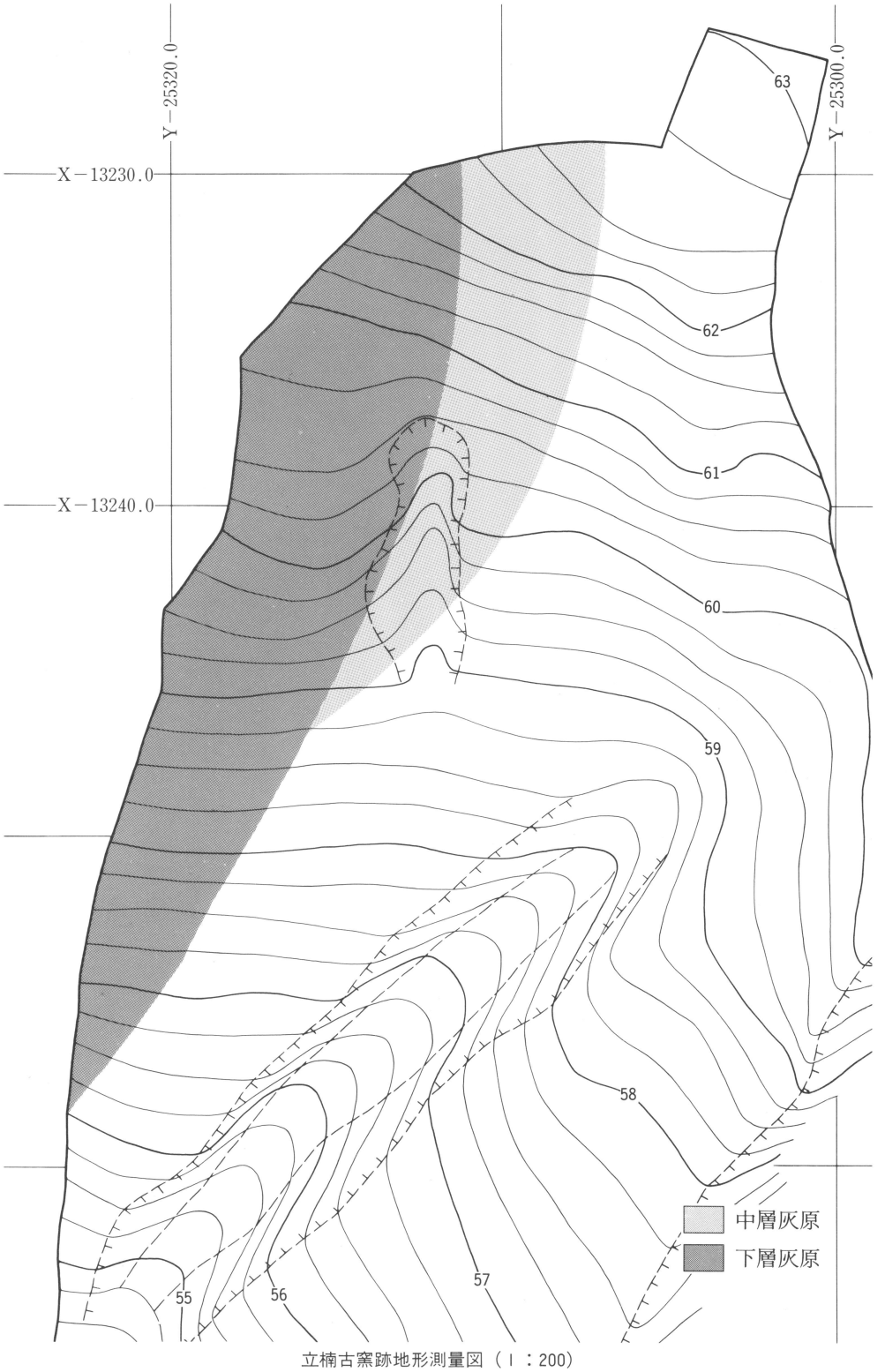
調査の概要　立楠古窯跡は知多半島の中央を南北にのびる丘陵から西側に張りだした尾根の南斜面に位置し、調査区の最高所で標高63ｍをはかる。

窯本体はおそらく知多中央道の建設時に破壊されており、調査区内では検出できなかった。また、ゴルフ場造成時に大きく地形が改変され、調査区の西側から南側にかけて黄褐色砂が２～３ｍの厚さで二次的に堆積していた。灰層の堆積は大きく三層にわかれ、それぞれに黄褐色砂の間層が入り込んでいる。灰層の分布範囲はおおむね右図のとおりで、西側はやはり道路建設時の破壊を受けている。灰層はそれぞれ最も厚いところで50cm程度あり、遺物量は灰釉系陶器の椀・皿がコンテナで約300箱出土している。遺物の時期は13世紀前半が中心であるが、間層を含めた灰層の堆積が最上層から最下層まで３ｍ近くあるため、堆積のメカニズムや各層の遺物の時期差など、今後あきらかにしていくべき課題は多い。

(樋上　昇)



調査区位置図（１：2,500）



立楠古窯跡地形測量図（1：200）

牛ノ松遺跡

調査の経過

幡豆山地の頂部をなす茶臼山（標高290ｍ）から北に伸びる低丘陵は、額田郡幸田町大字須美地内で緩やかな勾配をなして台地へと続き、さらに須美川に至る。牛ノ松遺跡はこの台地上に立地する遺跡で、地籍は大字須美字牛ノ松である。

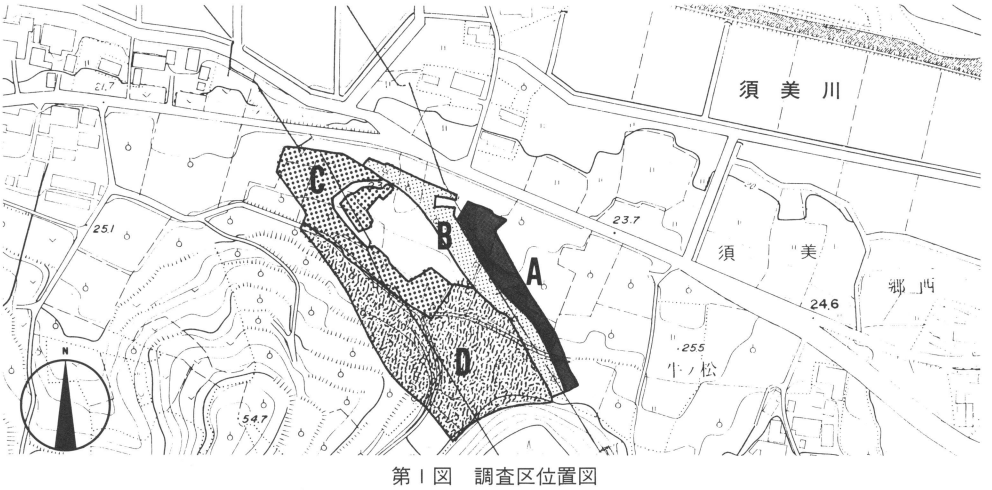
今回の調査は、一般国道23号岡崎バイパス建設に伴う事前調査として、建設省中部地方建設局名四国道工事事務所より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、13000㎡を平成４年４月～平成５年３月にかけて実施した。

調査の概要

調査にあたっては、広い面積に加えて、工事用土砂運搬道路や沈砂池の存在、工事日程等も考慮し、調査区を第１図の如く四小区に分け、Ｂ・Ａ・Ｄ・Ｃ区の順で調査した。

調査結果（Ｄ区を除く）を素描すれば、遺跡の時期は大別して旧石器～縄文と鎌倉～室町期に分けることができる。前者の遺構は確認できなかったが、遺物としてはＡＢ区を南北に貫く谷地形の下層より、黒曜石・頁岩製のポイント・スクレイパー・石鏃などが出土した。付近からの流れ込みと考えられる。

中世の遺構としては、谷地形をはさんで東西にそれぞれ方形に巡る溝や柱穴、土坑、土壙墓などを検出し、屋敷地が想定される。出土遺物としては、灰釉系陶器や常滑産の甕、土師器皿・青磁・宋三彩などの輸入陶磁片などがある。当時この地は伊勢神宮領であったと考えられ、それとの関係も踏まえる必要がある。（大橋正明）



第１図　調査区位置図



第 2 図　遺跡全体図

遺構

牛ノ松遺跡は、調査区のほぼ中央を南北に走る谷地形により東西に分けられる。今回の調査では、緩斜面性の堆積である黄褐色砂・シルトを基盤とした地域である東側で多くの遺構が検出されており、それより古い時期と考えられる赤色土壌を基盤とした地域の谷の西側（92D区）や東側の東端では遺構の密度が希薄となっている。また、幅約20mで、中世の遺物包含層を除いた谷底面と遺構検出面の比高差が約2～2.5mを測る谷地形は、中世層までは掘削可能であったが、その下層にある尖頭器や石鏃が出土する礫混じりの砂層については、礫や湧水のため全面にわたって調査することができなかった。

旧石器時代～縄文時代

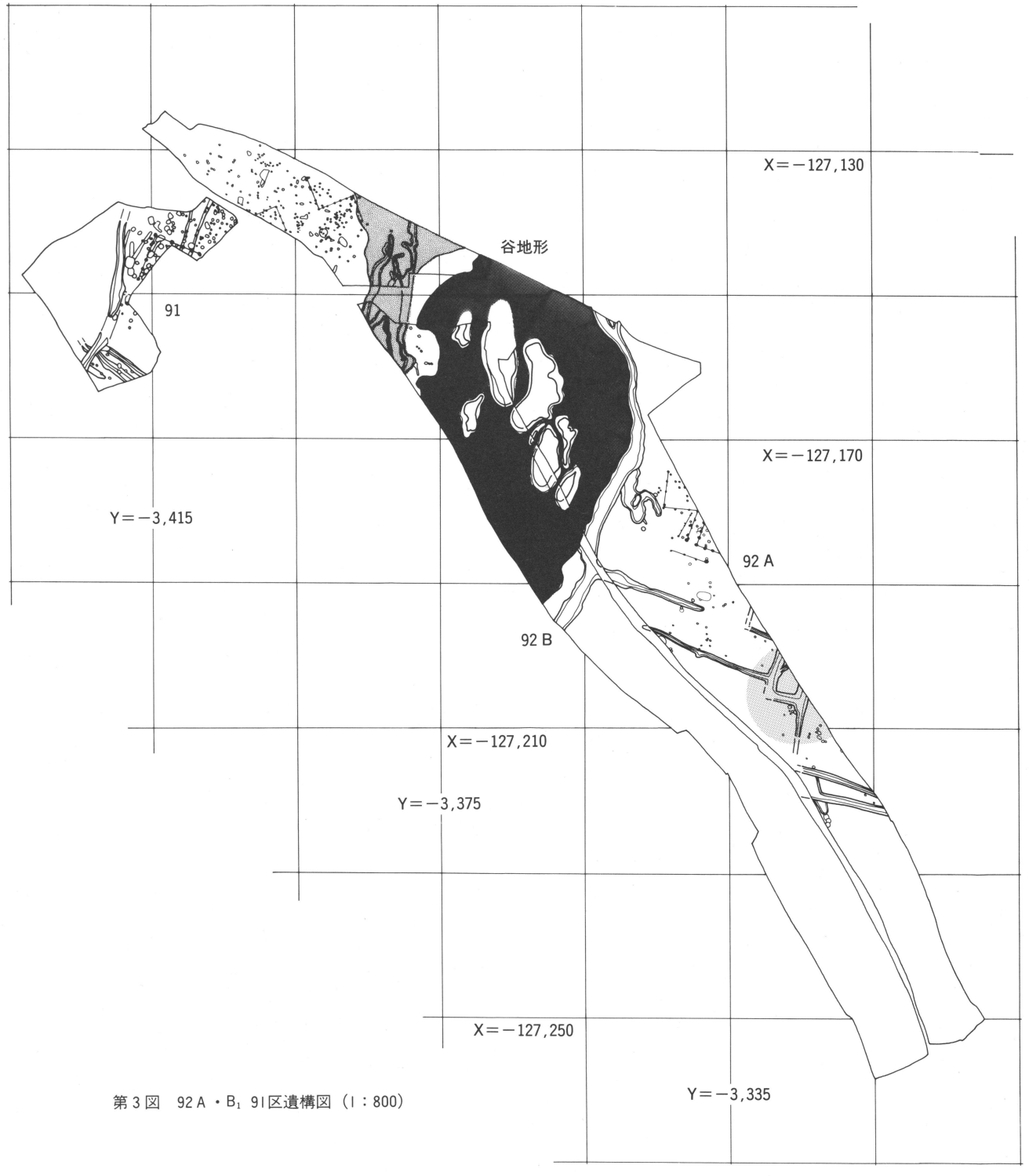
92A区の南東部において、中世の遺構検出面である黄褐色砂層の上層（下層に比べやや暗い土色を呈する－暗黄褐色砂層）より石鏃・細石核・剥片などが106点出土した。この暗黄褐色砂層は、谷の方向である北・西にむかってゆるやかに下っており、東・南側は後世の削平を受けている。石器群もこの傾斜に沿うように北・西にいくほど低い地点より出土している（第4図）。またこの底地部分に堆積した暗茶褐色シルト層からも石器群が出土したが、点数は少なく、高位地域よりの流れ込みであると考えられた。さらに、一部の石器は谷地形から出土している。これらの石器群については、篩による選別でも数点の微小剥片しか出土しなかったことや、礫群などがみられないこと、出土位置が傾斜していることなどから、居住場所や石器製作場所として認めることは難しいものと思われる。

中世（鎌倉時代～室町時代）

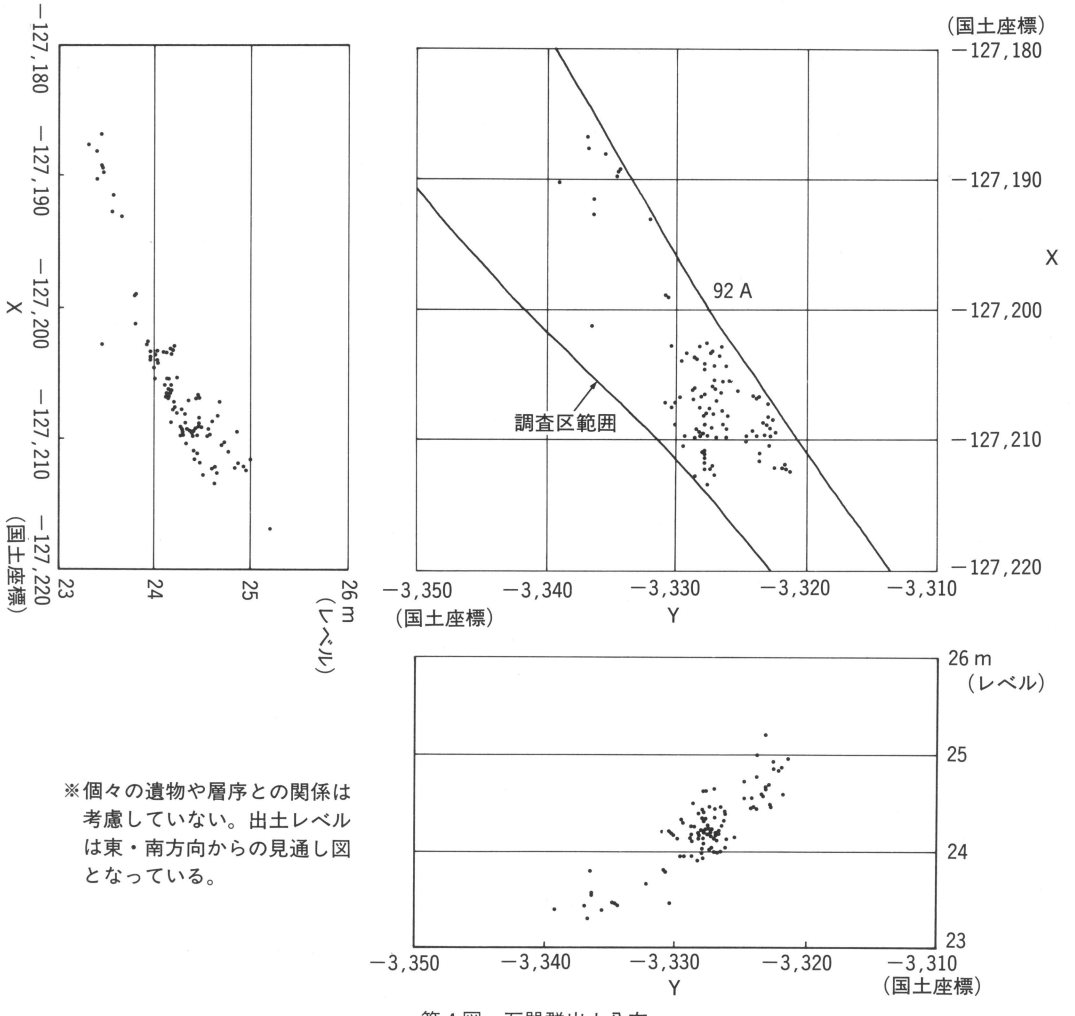
中世は居住域となる。この時期の谷地形には明らかに水流がみられるが、谷全幅にわたるような大きな流れではなく、中洲状になった砂の高まりがいくつもあり、その間を小水流が流れるといった状態であったことが想定される。さらに西側には、数条の不定形な溝を伴い、本流と平行して走る浅い谷地形もみられる。

谷地形の東側では、谷の肩に沿って走る幅2～3m・深さ0.5～1mの溝（92A区SD20・92B区SD06）と、そこから分岐して谷地形に直交して直線的に延びる溝があり、この直線の溝を基準とした溝で区切られた方形の区画が2ケ所みられる。溝は2～5mの間隔をもって2条が平行して走っており、谷地形に近い区画の南側では、内外の溝を異なる地点で途切れさせ、鍵状の出入口を設けている。また、この区画内では掘立柱建物が検出されている。谷地形に沿って走る溝からは、灰釉系陶器の椀・皿や土師質の皿、宋三彩片など多量の遺物の出土があった。時期は13世紀後半～14世紀前半となろう。

同じく谷地形の東側で、楕円形の土坑の長辺にあたる壁際から、灰釉系陶器の椀と鉄製の刀子、その反対側の壁際に皿をもつ12世紀後半～13世紀前半の土壙墓も検出されている。



第３図　92 A ・B_1 91区遺構図（1：800）



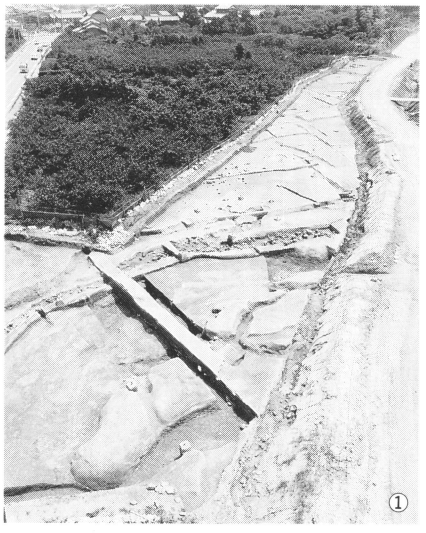
第 4 図　石器群出土分布



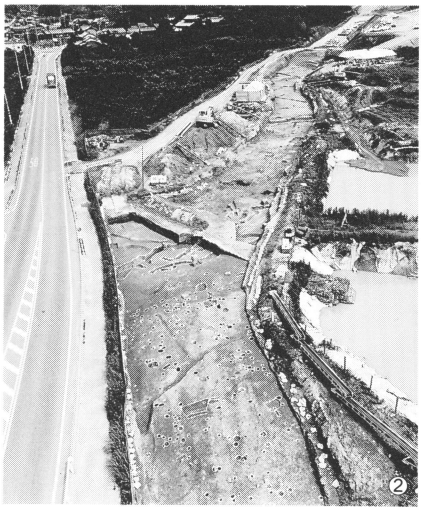
92 A 区　石器群出土状態
(ピンポールが出土地点)



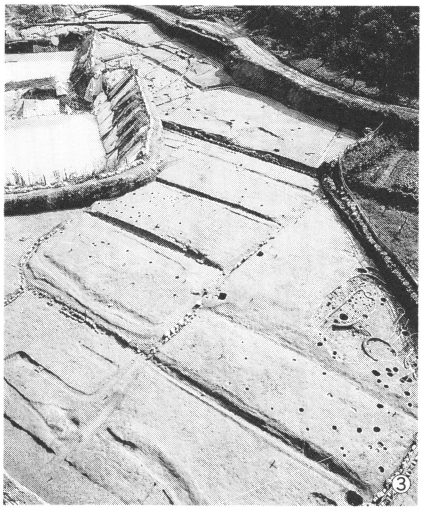
92 B 区　谷地形より出土した尖頭器
(ピンポールが出土地点)

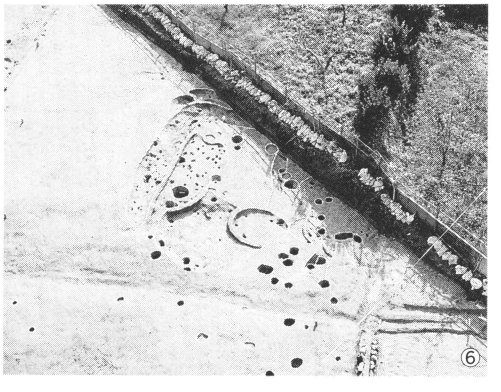














1．92 A 区
北東部（北西より）
2．92 B 区
北東部（北西より）
3．92 D 区
北東部（北より）
4．92 A 区
土壙墓（SK 16）
5．92 B 区
SD 06 土器出土状態
6．92 D 区
SD 35
7．92 D 区
南東部（北壁セクション）
（谷地形と SX 01）

谷地形の西側では、東側にあるような谷地形に沿って走る溝はみられなかった。ただ、昨年度の調査区において東側の区画溝と同様に谷に平行する溝とそれに直交する溝が検出されており、そこを区画の南西端とすると、東側のものとほぼ同じ規模となる。また、区画内には掘立柱建物や柵列がある。

遺物

旧石器時代～縄文時代

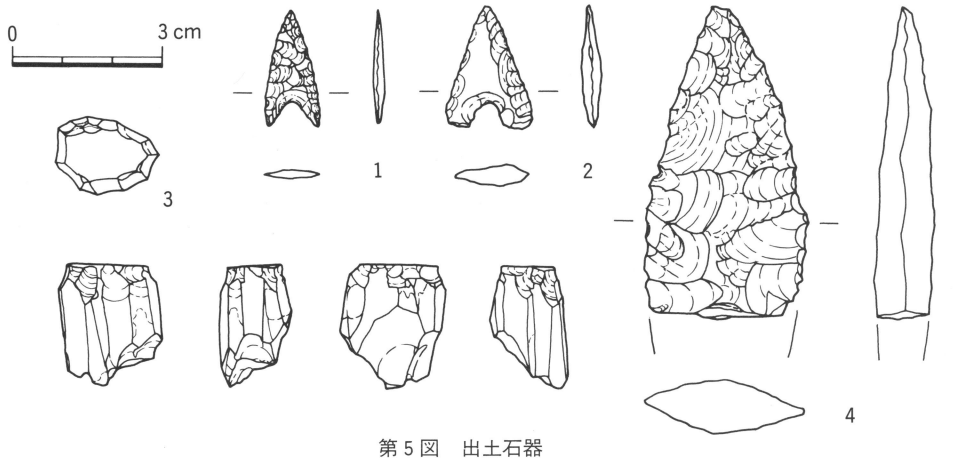
十分な検討は行っていないが、今までのところナイフ形石器文化まで遡るものは出土しておらず、92A区の石器群下層や谷地形で見つかっている細石核や尖頭器が最も古く、細石刃文化～縄文時代草創期に属するものと考えられる。また、第5図の石鏃は鍬形鏃に分類される縄文時代早期のもので、その他の石鏃もおそらく縄文時代のものと思われるが、同時代の土器は出土していない。

中世（鎌倉時代～室町時代）

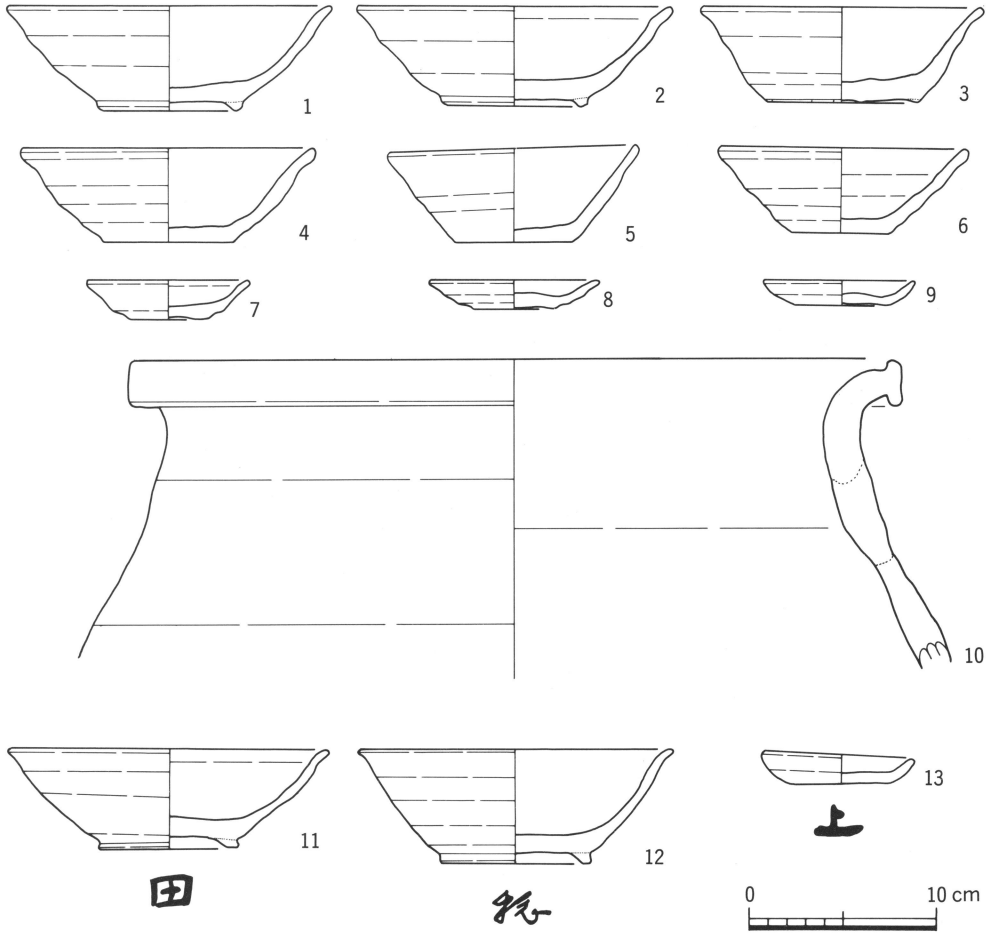
鎌倉～室町時代を中心とした当該期の遺物には、灰釉系陶器の椀・皿、土師皿、常滑産の鉢・甕等に加えて、中国龍泉窯産と思われる青磁・白磁がある。中でも「宋三彩牡丹文洗」と呼ばれる中国産陶器は、戦国時代尾張守護所であった稲沢市下津城跡についで愛知県下2例目のものである。各部の破片が9点出土しており、外面に緑釉、内面に緑釉・黄褐色釉・ヘラによる沈線が施されている。

これらの遺物の多くは集落を取り囲むと考えられる溝（92A区ＳＤ20・92B区06）から出土している。その時期は13世紀後半から14世紀前半を中心とする。

また溝出土の遺物群より約1世紀古い一群の遺物が谷地形の埋土中から出土している。これらの遺物の内、灰釉系陶器の椀・皿の底部には「田」・「稔」・「上」と記されている墨書陶器も含まれている。

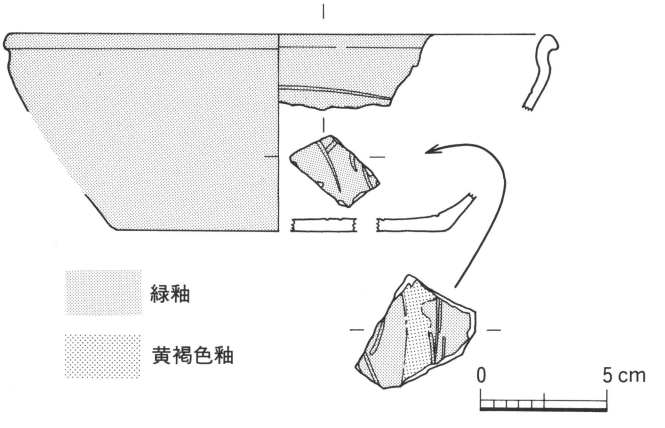


第5図　出土石器



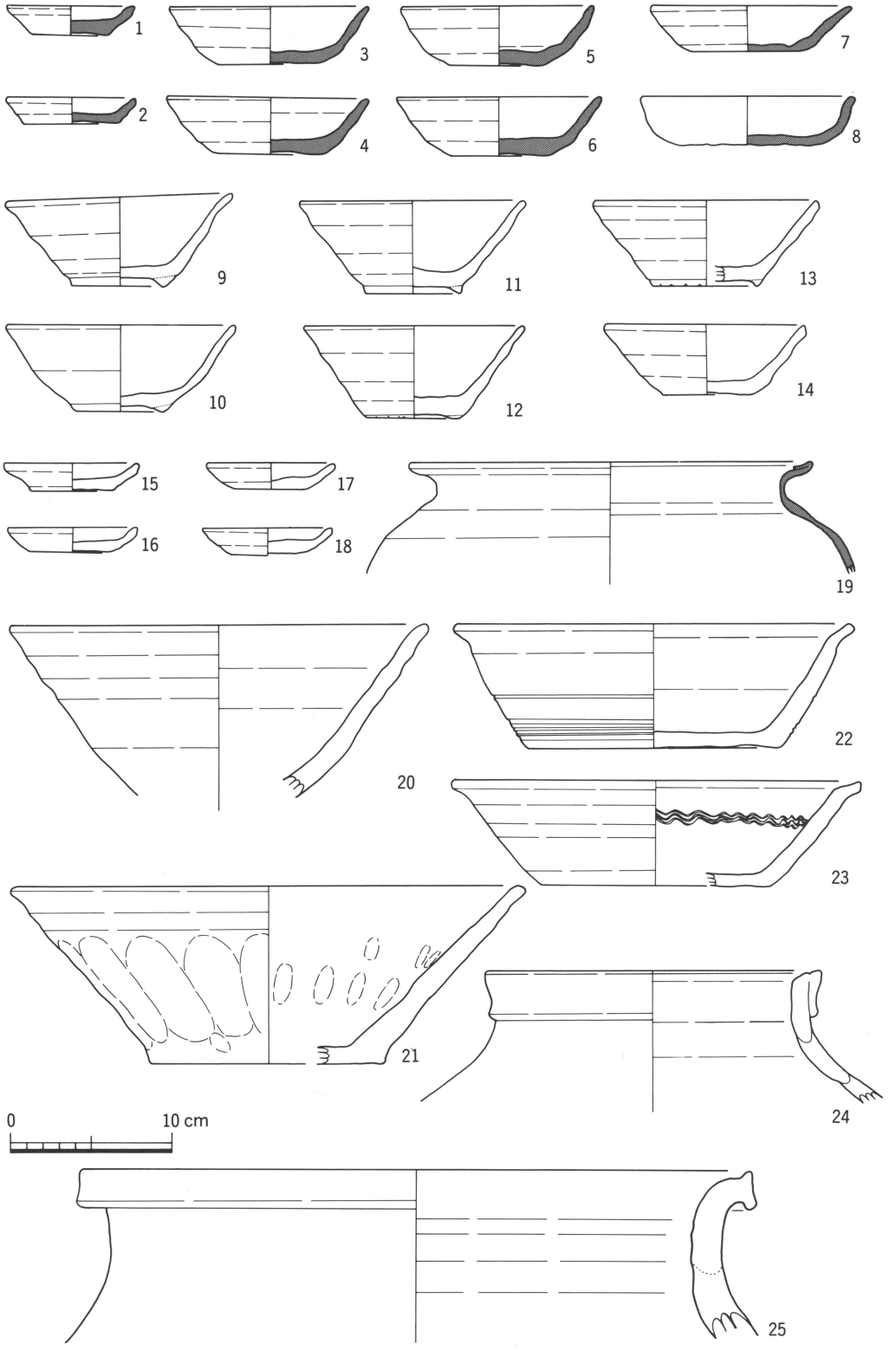
第6図　出土土器　　1～10　SD06、11～13　谷地形
(10のみ1/6)





第7図　宋三彩洗（径・高は推定）

◀ SD20土器出土状態



第 8 図　出土土器　1 ～25　92 A SD20

まとめ

1．旧石器時代～縄文時代にかけての明らかな遺構は検出されなかったが、当該期に属すると思われる石器群が確認された。これらの石器群は谷地形にむかって低くなっていく、ゆるやかな斜面に堆積した二次堆積物の可能性が高い。ただそのまとまりからみると、近くに石器製作場所か居住場所があり、そこから運ばれたものと考えた方がよいようである。今後、各々の石器の分析や分布状況、土層堆積との対比などを詳細に検討しなければならないであろう。

2．今回の調査で確認された鎌倉時代～室町時代の中世遺構のうち、溝については大きく2つの種類に区別する事が可能と考えられる。一つは92A区において検出された屋敷地を区画する溝である。これに対するいま一つの溝は、92A・B区において確認された谷地形に沿う様に掘削され、集落を囲い込む役割を持っていると思われる溝である。この溝は92C区でも検出されており、その掘削が谷地形のどの位置から始まっているのか、どのように収束していくのかが、注目される。

3．中世の牛ノ松遺跡では、谷地形を挟んで東集落と西集落の2つの集落が立地していたことが判明している。このうち先に述べた集落を囲い込むと考えられる溝は、東集落のみに存在し、西集落では確認されなかった。これに対し西集落では溝の代わりに谷地形に沿う様に柵列が構築されていた可能性がある。この集落の構造に関する差はいかなる事に起因するのであろうか。今後の課題である。　　（宮腰健司・川井啓介）





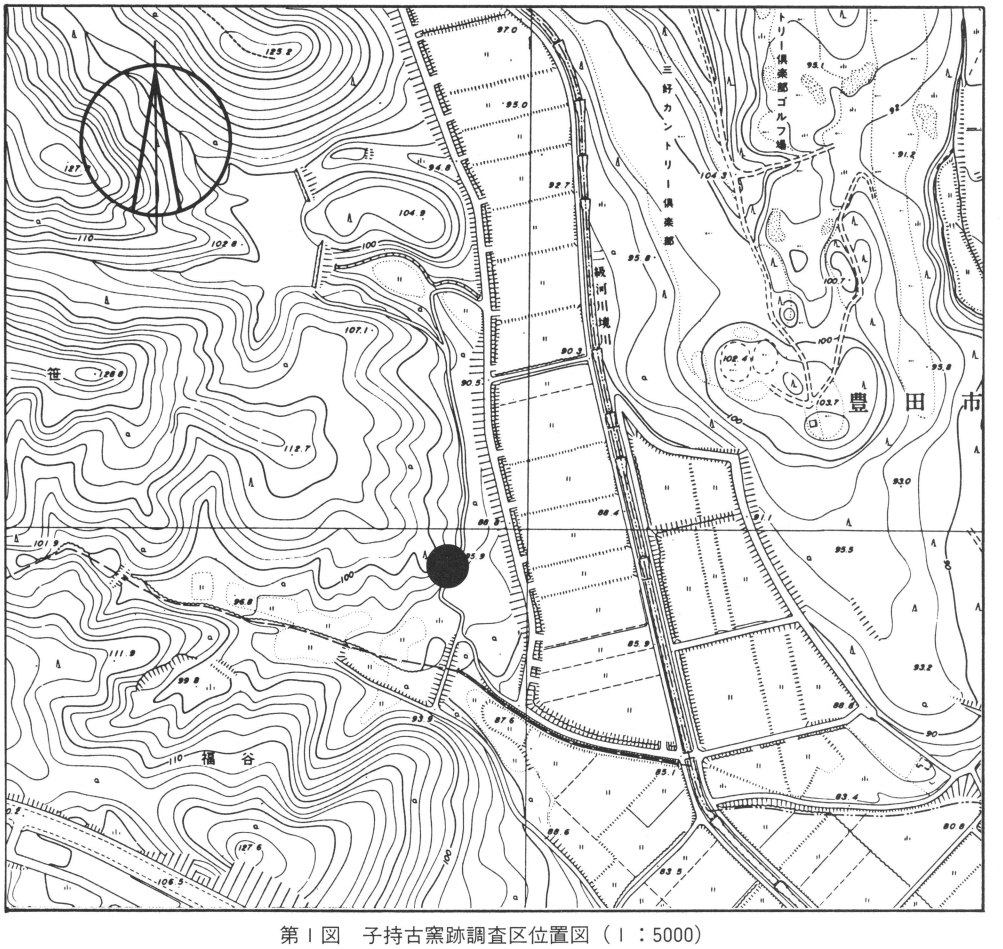
△92A区SD20と谷地形
◁92A区区画溝の途切部

子持古窯跡

調査の経過

子持古窯跡は、西加茂郡三好町大字黒笹字丸根に所在する鎌倉時代の古窯跡である。本古窯跡は境川の上流域にあたり、南東に開口した開折谷の東側斜面、標高100ｍ前後に立地している。これまで同地区には、鎌倉時代の古窯である遺跡番号「Ｋ－Ｇ－２」と「Ｋ－Ｇ－３」の２基が残存するものとされていた(『猿投山西南麓古窯跡群分布調査報告Ⅰ(1980)』)。今回県企業庁による内陸用地造成の事前調査として、伐採を約5000㎡行い、その内の約1300㎡の範囲にわたり調査を実施した。

調査の結果、「Ｋ－Ｇ－２」と考えられる古窯１基とその関連施設が検出され、多くの成果を得ることができた。



第Ⅰ図　子持古窯跡調査区位置図（Ⅰ：5000）

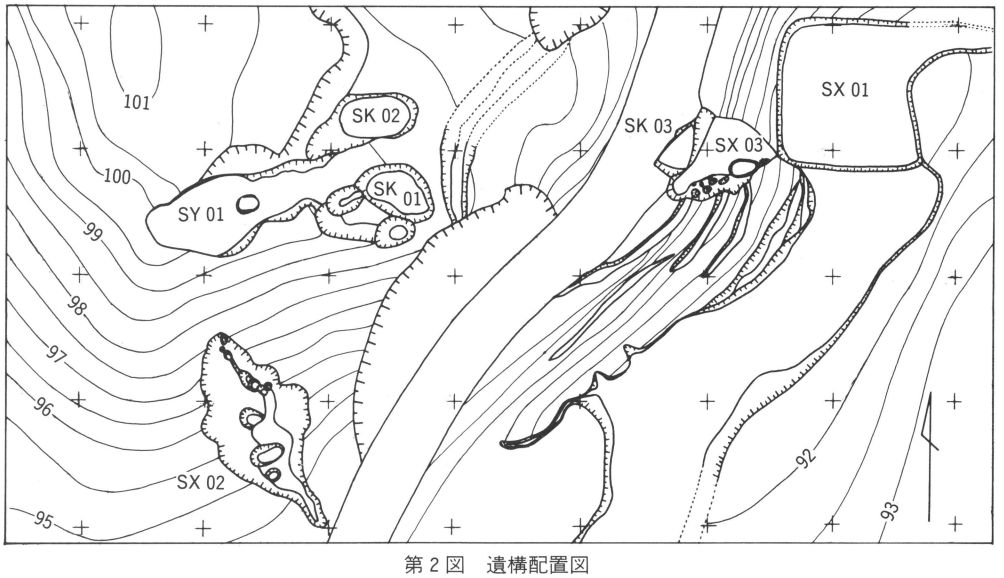
調査の概要

調査区内は遺構配置図（第２図）からもわかる通り、何か所にもわたって後世の改変を受けている。とりわけ旧地形の復元を困難にしているのが、調査区内を南南西から北北西にむかって丘陵東斜面を切り開いて第二次大戦後に敷かれた林道である。この他にも、重機で掘った土取りと思われる穴が点在していた。

調査の結果、当初焼成室上部のみ残存すると思われたが、煙出し部分を除き、良好な状態で窯体を検出することができた。ＳＹ01の現存長は７ｍ、最大幅３ｍ13cm、床面傾斜は平均で30度あった。分焔柱を有する13世紀頃の窖窯である。天井部は、焚き口から見て右側に陥没した状態で窯内に堆積していた。

窯内遺物については、焼成室内において天井部に押しつぶされる格好で、焚き口右手方向から山茶椀や焼台が多数出土した。また、燃焼室内においても山茶椀が乱雑に積み重なった状態で出土している。これらの状態は本窯の最終操業当時、窯出し前に天井部が崩落したため、焚き口左手の隙間から焼成室内の製品を取り出し、不完全品を燃焼室に廃棄したものと考えられる。なお窯体断ち割り調査の結果、２面の床面を確認することができた。

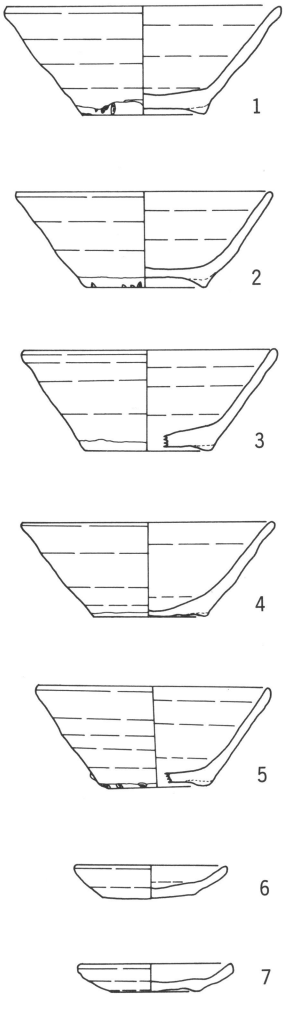
前庭部では２基の窯前ピットを検出した。長径３ｍ31cm、短径２ｍのＳＫ01と長径４ｍ80cm、短径１ｍ92cmのＳＫ02はともに楕円形状を呈し、山茶椀が多数出土した。



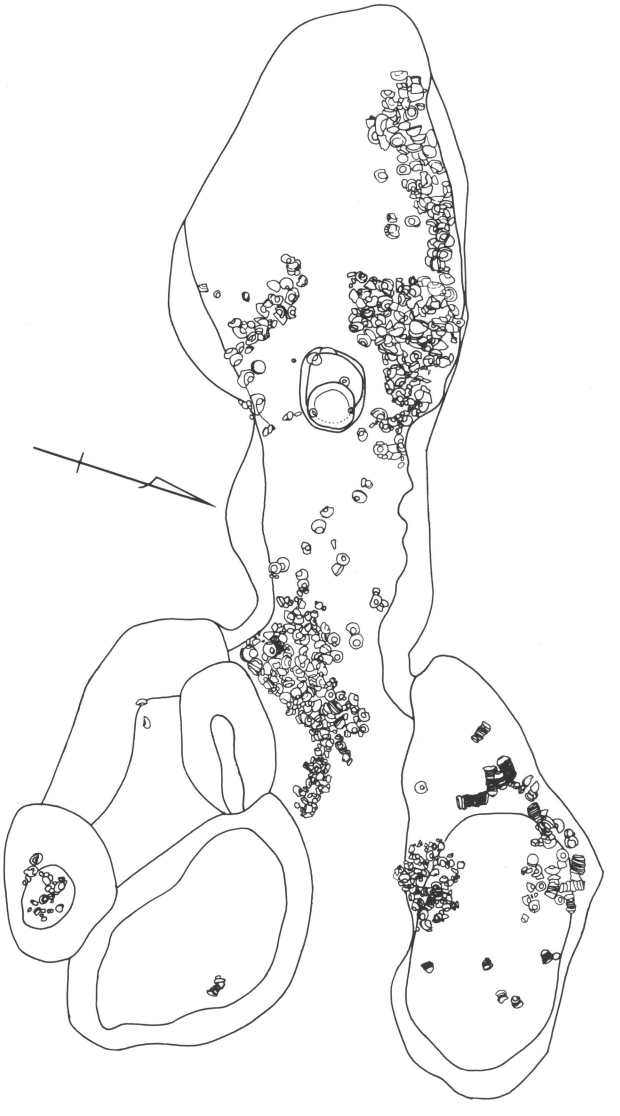
第２図　遺構配置図

なおＳＫ02の北西壁上部から、34個の陶丸を入れた山茶椀が出土した。焼いた陶丸を集めたまま置き忘れたものであろうか。ＳＫ03は粘土を貯めた長辺２ｍ10㎝、短辺90㎝、深さ70㎝の土坑で、灰白色粘土がつめられており、底部には小礫が敷かれていた。

遺物としては、13世紀前半代の多量の山茶椀が中心で、その他小皿や若干の陶丸も出土している。



第３図　SY01出土遺物



第４図　SY01遺物出土状況（１：80）

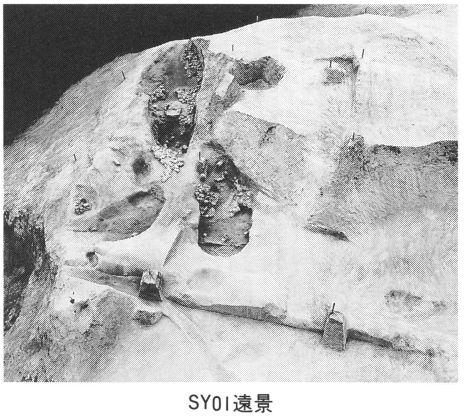
まとめ

本古窯跡の発掘調査のうち特筆すべき成果は、上記の遺構の他に採掘した粘土を水に浸して貯蔵・精製した施設と考えられるＳＸ01を検出したことがあげられる。

ＳＸ01は、ＳＫ03の東下方の谷底のり面が垂直に掘り下げられ、ほぼ５ｍ×５ｍの方形土坑を呈している。平坦な床面の西側部分には赤褐色粘土が２～３cmの厚さで貼られていた。そしてその直上で、直径数cm～60cmの灰白色粘土塊を多数検出した。

またＳＸ03は、最大幅３ｍ50cmを有する三角形状をしたくぼみと７段のステップからなる。さらに、そこから南へ水平に斜面をめぐる幅約50cmの細長いテラスを５条確認することができた。これらの施設は、谷底に蓄え、精製した粘土を運び上げるためのものと考えられ、ＳＸ01の関連施設ととらえてよいものと思われる。

本調査においては工房跡の検出はできなかったものの、窯体と灰原だけでなく粘土ピットや規模の大きな関連施設等が確認できたことは、同時期における窯業生産を考える上で格好の材料を提供することができたと考える。　　（杉浦　茂）



SY01遠景



分焔柱付近



SX01遠景



SK03とSX03

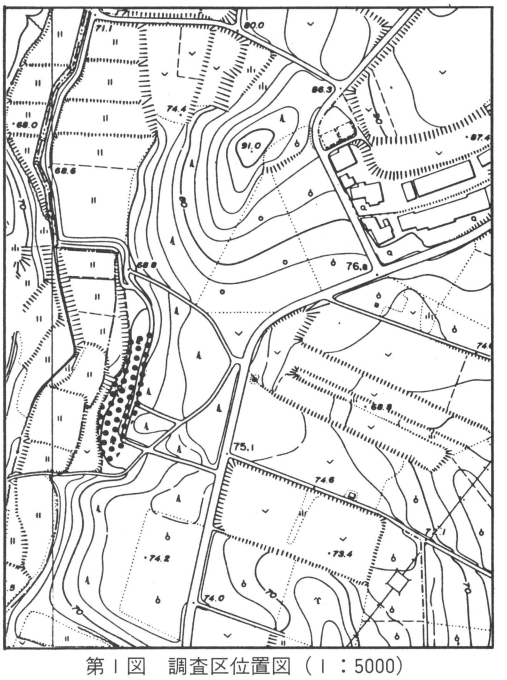
黒笹(くろざさ)40号窯跡・黒笹89号窯跡

調査の経過

西加茂郡三好町に所在する黒笹40号窯と黒笹89号窯は、大山と呼ばれる標高117.5ｍの丘陵から派生する４つの支丘上の一つの米ヶ廻間谷の東斜面の中腹に位置している。この二つの窯は、昭和31・32年にかけて愛知用水工事に伴う古窯跡の調査として名古屋大学考古学教室を中心にして発掘調査が実施された。その成果は、「愛知県猿投山西南麓古窯跡群」（昭和32年・３月、昭和33年・３月）として愛知県教育委員会より刊行されている。今回は県道豊田知立バイパス建設に伴う調査として実施した。調査は平成４年10月から平成５年１月までの期間で、窯体については再調査となったが2100㎡を調査した。（野本欽也）

調査の概要

米ヶ廻間谷の東斜面に南北に長い調査区を設定した。窯体が立地する東側の林道より上は開削のため平坦面となっている。窯体の下部には側溝が通り、黒笹89号窯の一部がこの側溝により壊されていた。側溝下は水田である。側溝の断面に昭和31・32年調査時の埋め戻し灰層が露出していた。灰原部分は両窯ともに水田化の時と発掘調査時の２度に渡って掘り返されており、攪乱層となっている。黒笹40号窯・89号窯ともに前回の調査以降の保存状況はきわめて良く、今回改めて窯体実測及び窯体の断ち割りを行った。窯体以外の遺構として、黒笹40号窯の南側上部で平坦な面を、北側で焼土跡を２ヶ所確認した。黒笹40号窯と黒笹89号窯の距離は20ｍ程である。



第１図　調査区位置図（１：5000）

黒笹40号窯は現存長６ｍ40㎝、最大幅１ｍ60㎝を測る。焚口部分に長さ１ｍ80㎝、幅82㎝、深さ37㎝の舟底ピットがあり、底は赤褐色に焼けていた。焚口から煙出しまで比較的よく残っており、床面傾斜は中央で29度を測る。北側の中央部分では蛇腹様を呈した窯壁が残っていた。灰原部分が水田化されており、今回水田にトレンチを入れたところ灰原の一部が良

好な状態で残っていることが確認でき、同時に灰原の範囲もほぼ確定できたが攪乱されている部分が多い。出土遺物には須恵器と灰釉陶器の製品があり、長頸壺、薬壺、双耳壺、細頸壺、浄瓶、杯、杯蓋、薬壺蓋、双耳壺蓋、甕、平瓶等のほか、ミニチュアの長頸壺、蓋も出土している。8世紀末から9世紀初の時期である。

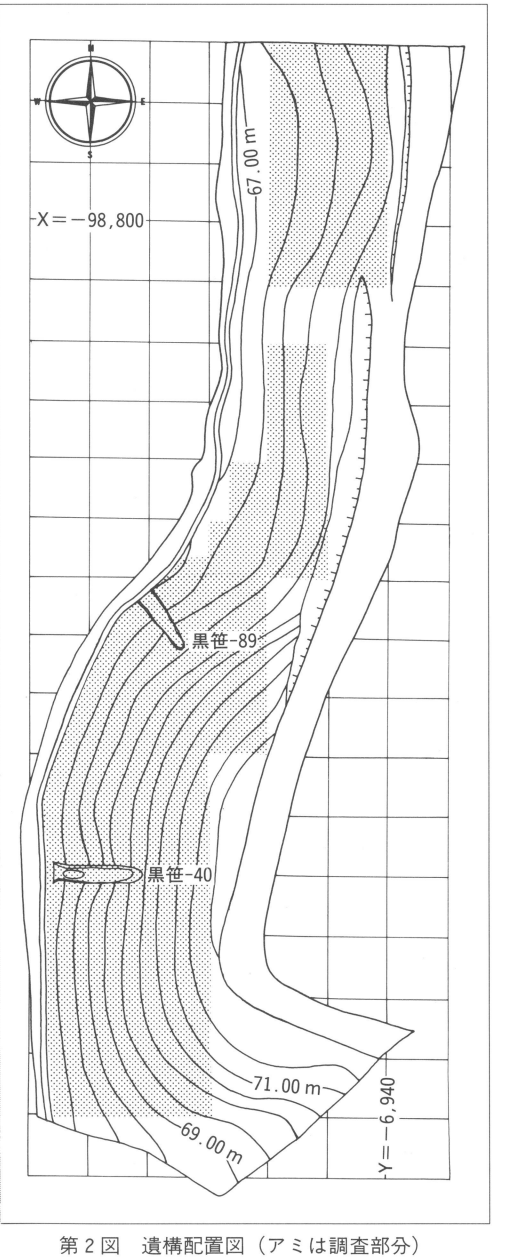
黒笹89号窯は現存長5ｍ70cm、最大幅1ｍ74cmを測る。窯壁の遺存状態は悪く北側の中央部分に一部残っていたのみであった。焚口には長径60cm、短径50cmの分焔柱が付設されている。窯体の断ち割りによって3回の床面が確認された。出土遺物は刷毛塗りの灰釉陶器と無釉の製品がその大部分をしめ、須恵器も少ないが出土している。花文の椀、輪花椀、皿、段皿、手付瓶、小瓶、香炉、壺等が出土している。9世紀後半の時期である。　（小澤一弘）



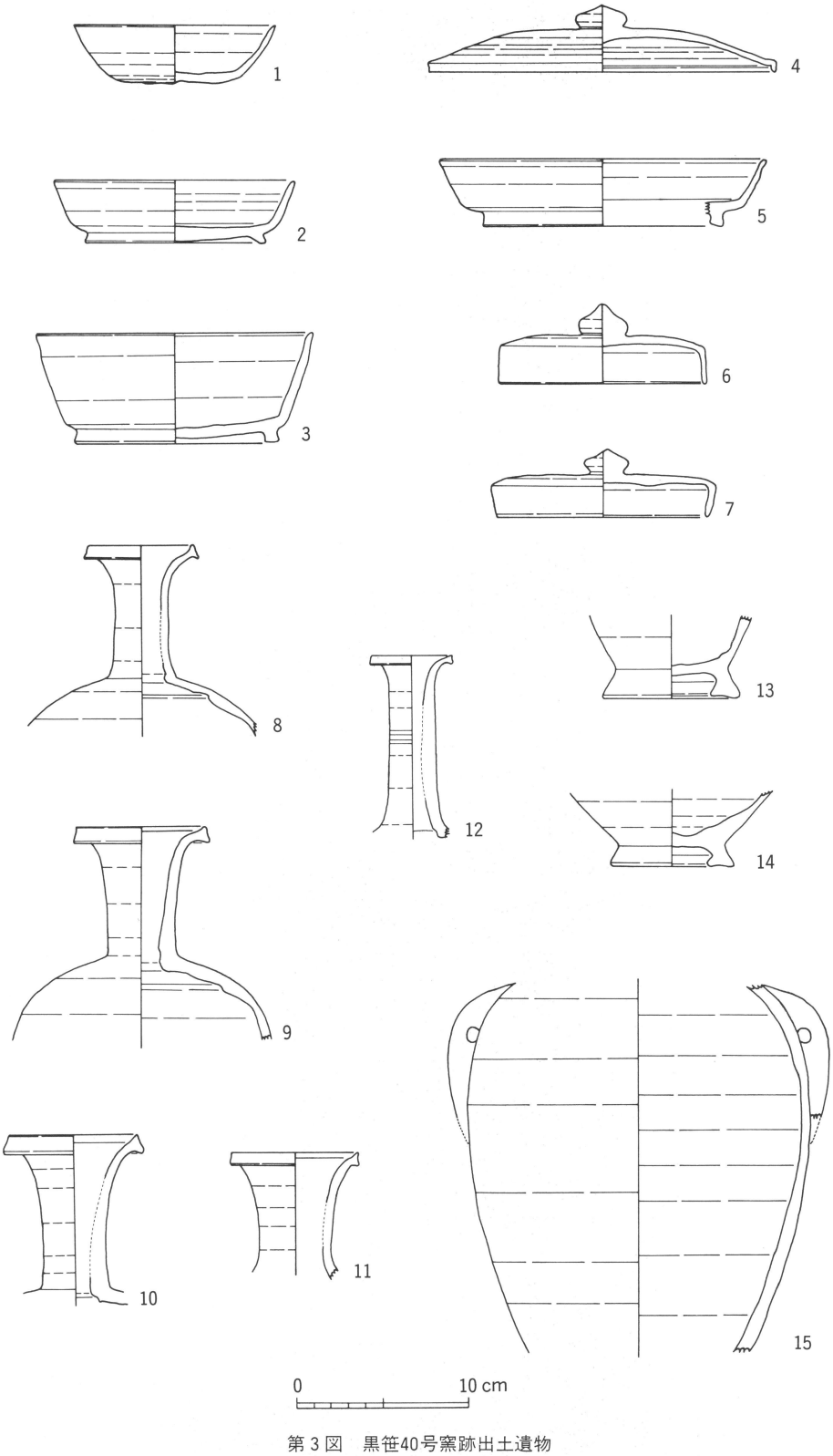
黒笹89号窯体全景



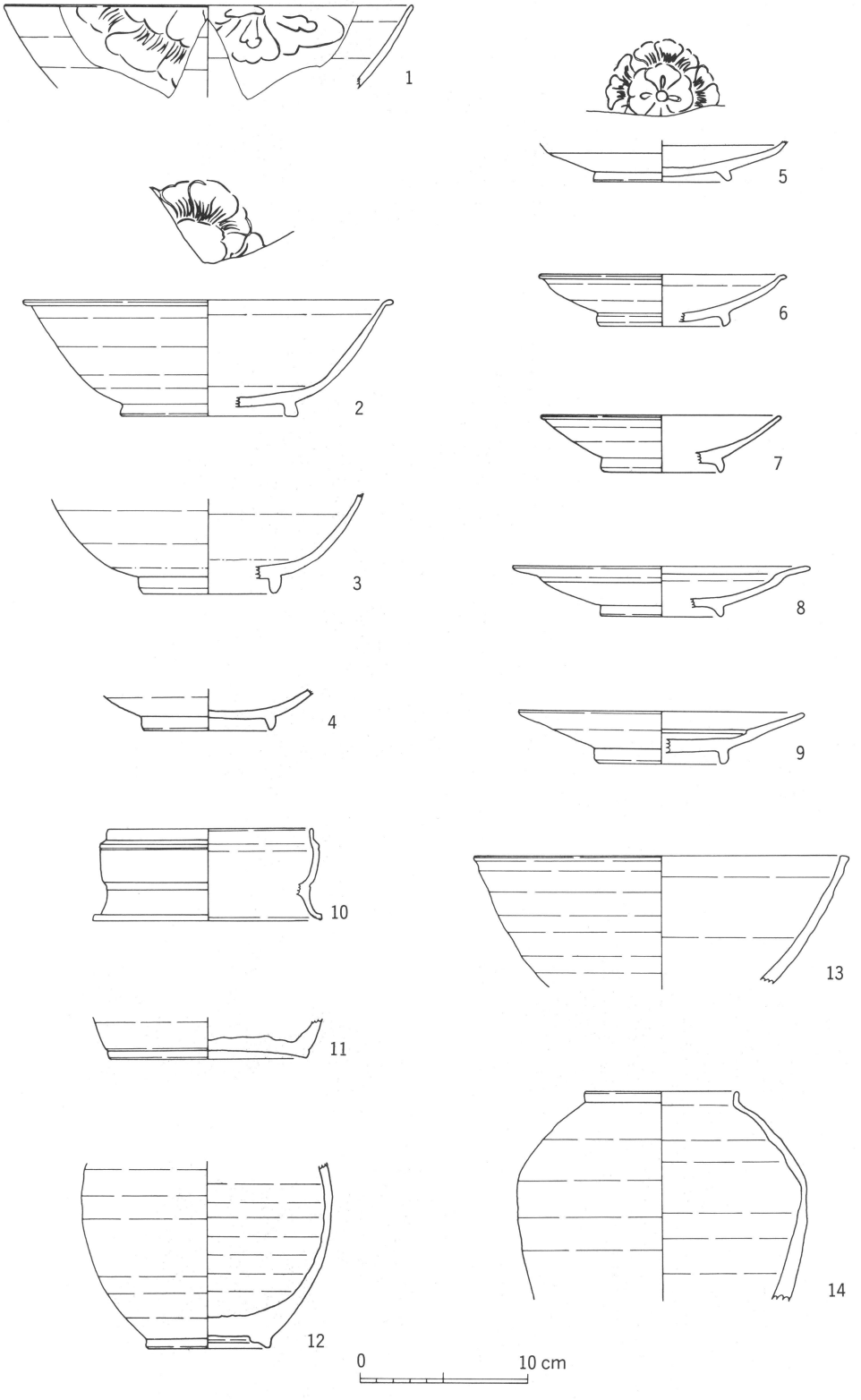
黒笹40号窯体全景



第2図　遺構配置図（アミは調査部分）



第３図　黒笹40号窯跡出土遺物



第 4 図　黒笹89号窯跡出土遺物

坂口（さかぐち）遺跡

調査の概要

坂口遺跡は、東加茂郡旭町大字池嶋字坂口に所存する。遺跡は矢作川によって東西方向に形成された谷地形の左岸、河岸段丘高位面に位置し、川に向かう北向きの緩斜面（標高約114m）に立地している。調査は県道島崎豊田線拡幅工事の事前調査として、平成3年度に行われたが、この結果、さらに西側にも遺跡が展開することが確認できた。このため前年度調査区西隣の拡幅予定地に対して、平成4年4月から8月まで調査が行われた。

基本層序は昨年度と同様と考えられるが、宅地造成における平地確保のために耕作土、攪乱土層と併せて遺物包含層の上部が削平されており、遺存度は昨年度の調査区の方が良好であった。調査区は拡幅予定地であるため現県道に沿って設定されたが、地形は西に向かうにしたがい上がっていた。遺物包含層は水平堆積から斜行堆積に変化するにしたがい薄くなり、さらに間層によってこれが分かれていた。したがって斜面堆積している部分が平面的に削平され、地形の上がっている部分で削平を免れた包含層も存在したため、層序の見極めに難を要した。

検出した遺物は昨年度と同様に、縄文早期から晩期までの各時期にわたる土器、石器である。但し最終検出面において見出せた土坑状の落ち込みに伴うものは僅かであった。

今回調査を行った坂口遺跡の遺構、遺物は、報告書作成のため昨年度分と併せて、現在整理検討中である。当該期の矢作川流域における文化動態を窺う上で、本遺跡の資料がその一助となることを期待したい。

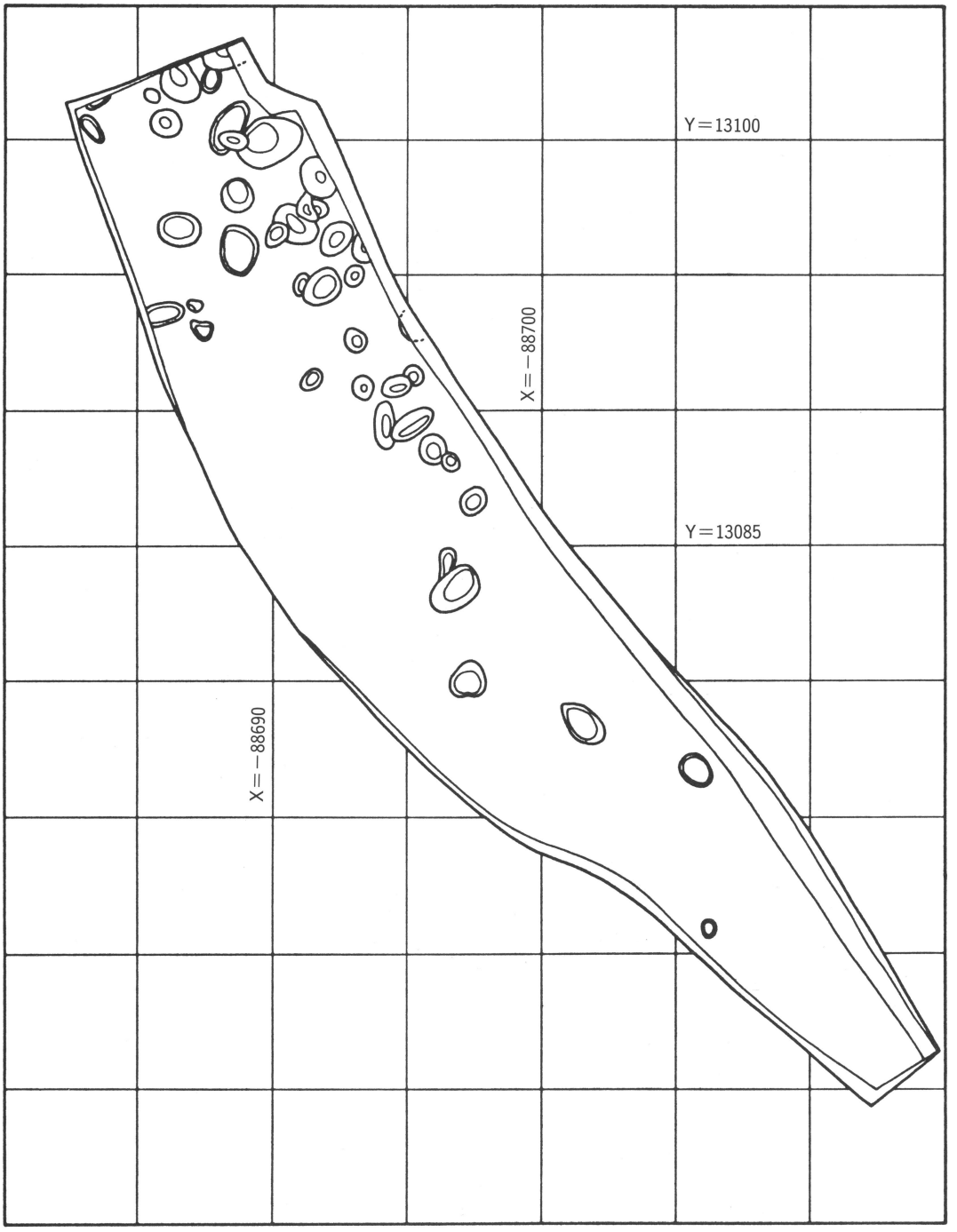
（松田　訓）



全景（北東より）



作業風景



第Ⅰ図　調査区遺構図

島田陣屋遺跡

調査にいたる経緯

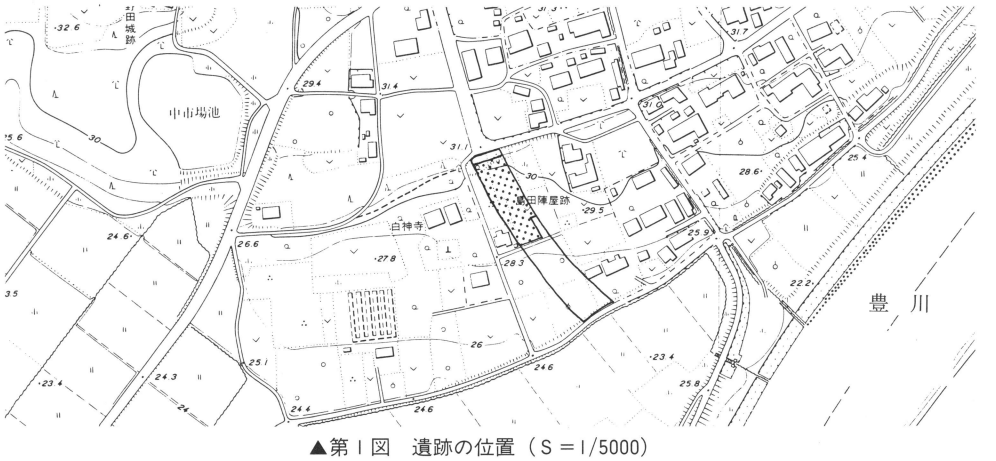
愛知県土木部道路建設課によって、新城市野田字西ノ郷地内に、野田城大橋建設に伴う橋梁改築が計画された。この地は、旗本島田氏の陣屋跡として新城市の市指定史跡であったが、平成4年9月に現状変更を行ない、橋梁改築部2,682㎡を発掘調査することとなった。本年度の調査は、愛知県土木部の委託を受け、平成4年9月から4年12月にかけて1,000㎡を発掘した。調査区は、市指定史跡の北西部を幅20m・長さ55mの規模でほぼ南北に縦断するように設定した。調査の結果、江戸時代の島田氏の陣屋にかかわる遺構だけでなく、弥生時代後期の竪穴住居跡や方形周溝墓などが検出され、複合遺跡であることが明らかになった。

調査の概要

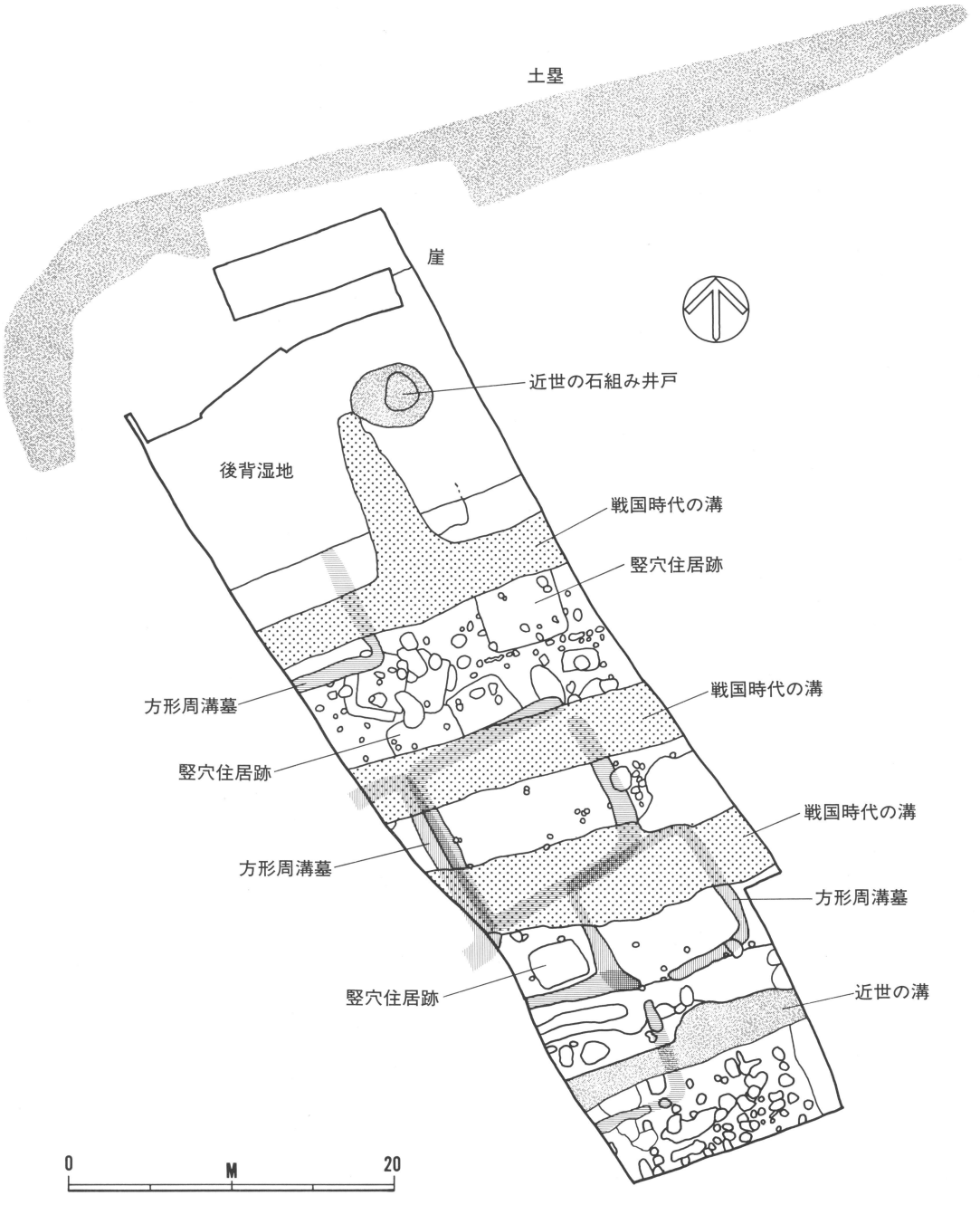
(1) 遺跡の立地

遺跡は、豊川の左岸に形成された低位段丘の末端に位置している。現在の豊川までは約150m離れている。

遺跡の北端には土塁が東西80mにわたって残存している。西端は南に屈曲していくが、後世の削平を受けたためか、5mほどで途切れている。この土塁は北から続く一段高い面の南端に位置しており、土塁のすぐ南は崖状に低くなって屋敷地となる。屋敷地は、緩やかに南に傾斜していき、低位段丘の段丘崖に至る。段丘崖には石垣が積まれ、遺跡の南端となる。標高は、遺跡の北端で約31m、南端で26mを測る。遺跡の南端と現在水田となっている沖積地面までの比高差は約3mほどである。



▲第Ⅰ図　遺跡の位置（S＝1/5000）


土塁
崖
近世の石組み井戸
後背湿地
戦国時代の溝
竪穴住居跡
方形周溝墓
戦国時代の溝
竪穴住居跡
戦国時代の溝
方形周溝墓
方形周溝墓
竪穴住居跡
近世の溝
0
M
20

第2図　遺構配置図

(2) 基本層序

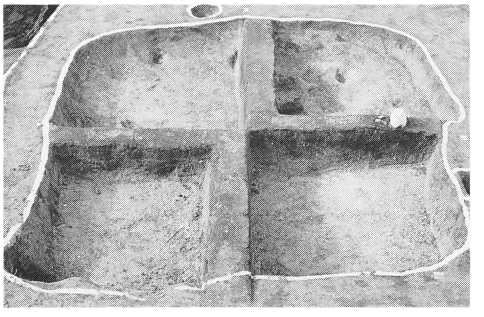
上層から①耕作土層（やや灰色がかった黒ボク層）②暗褐色土層③黒ボク層④基盤である黄褐色土層（上部はよく締まった褐色土で、しだいにシルト質になり、下部は大小の礫を含む黄褐色の砂層である）の順に堆積し、これが調査区全域に通有の基本層序である。

調査区の北部、すなわち土塁と屋敷地の間には後背湿地状の「落ち込み」があり、この地域に耕作土層と暗褐色土層の間に黄褐色土・暗褐色土・黒ボクのブロック層が見られ、近世の整地層（盛り土）と考えられる。また、調査区の南部では、暗褐色土層・黒ボク層・黄褐色土層をきってしまりのない黒褐色土層が堆積しており、近世に大がかりな削平が行われた事を示している。

(3) 遺構

弥生時代

竪穴住居跡　計７棟の竪穴住居跡が検出された。時期は明らかではないが、後述の方形周溝墓にきられていることや埋土中から出土した土器を考慮に入れると弥生時代後期と考えてよいであろう。分布は、北の６棟と南の単独の１棟に区分可能で、北の住居跡は建て替えが見られる。すべて隅円方形で、規模は総じて小さい。



弥生時代住居跡（東から）

方形周溝墓　後世の遺構と重複しているため部分的にではあるが、５基の方形周溝墓が検出された。規模が明らかになったものは、一辺約９ｍと12ｍである。溝は垂直で深く、しっかり掘られているが、主体部・盛り土は削平され、検出できなかった。溝内で、供献された土器や高杯の杯部を蓋にした壺＝壺棺か＝が出土している。いずれも弥生時代後期の欠山期に属するものである。



方形周溝出土壺棺



方形周溝墓土器出土状態

戦国時代

溝　ほぼ東西方向の３本の溝が検出された。いずれも幅５ｍ・深さ２ｍ前後の規模を有し、溝というよりは、堀に近い。埋土下部より16世紀の遺物が出土している。現時点では確定できないが、南に屋敷地が展開する区画溝と考えられる。３本の溝は、17世紀の遺物をわずかに含むブロック層で埋められている。この層は、近世の整地層と同じ構造である。



戦国時代　溝

江戸時代

整地層　耕作でかなり削平されてはいるが、後背湿地状の「落ち込み」を埋める整地層（盛り土）が認められた。この整地層の上面で、柱穴状の掘り込みが列状に数列検出され、建物跡の存在が想定される。調査区の南部では、基盤を50㎝ほど削平した状況が確認された。境には東西方向に溝が走っており、幕末の遺物が大量に廃棄してあった。



江戸期整地面ピット列

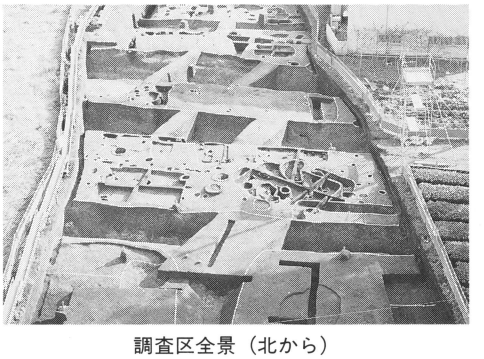
井戸　調査区の北東隅で、井戸が１基検出された。やや扁平な礫を使用した石組み井戸で、木枠が井戸底に組まれていた。



石組み井戸

まとめ

江戸時代の島田陣屋に係わる遺構・遺物はやや希薄の感がある。それに対し、史料に見られない戦国期の屋敷地が想定されただけでなく、古く弥生時代後期の集落が確認された事は豊川中流域の歴史を考える上で特筆すべきであろう。平成５年度に実施する遺跡の南半の調査の成果を加えれば、多くの事実が補強されるものと考えられる。　（都築暢也）



調査区全景（北から）

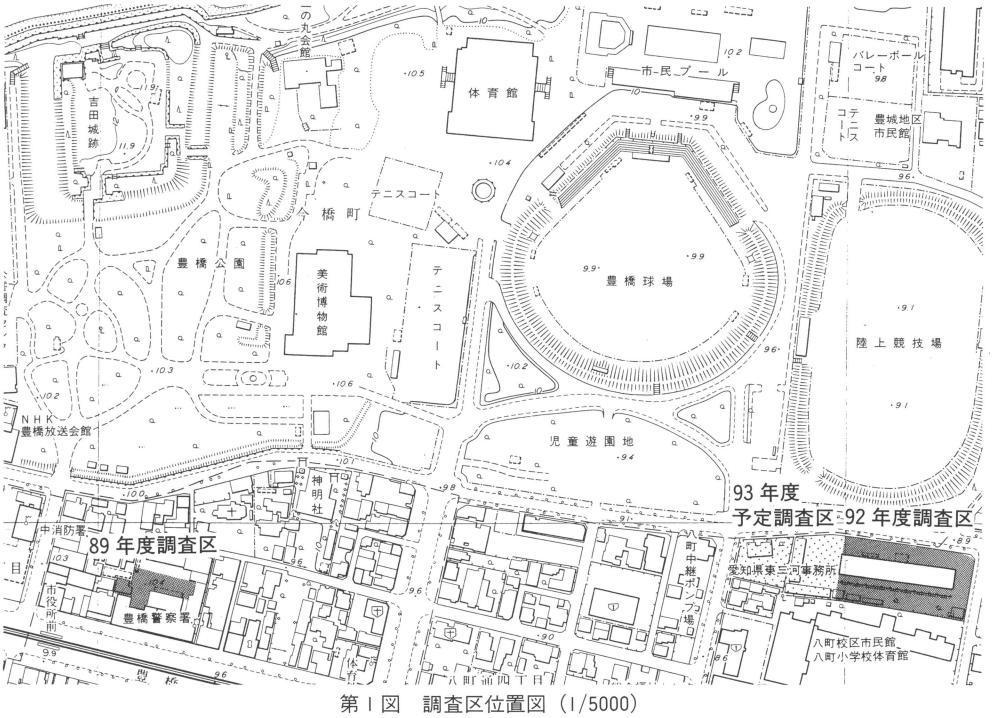
吉田城遺跡

調査の経緯

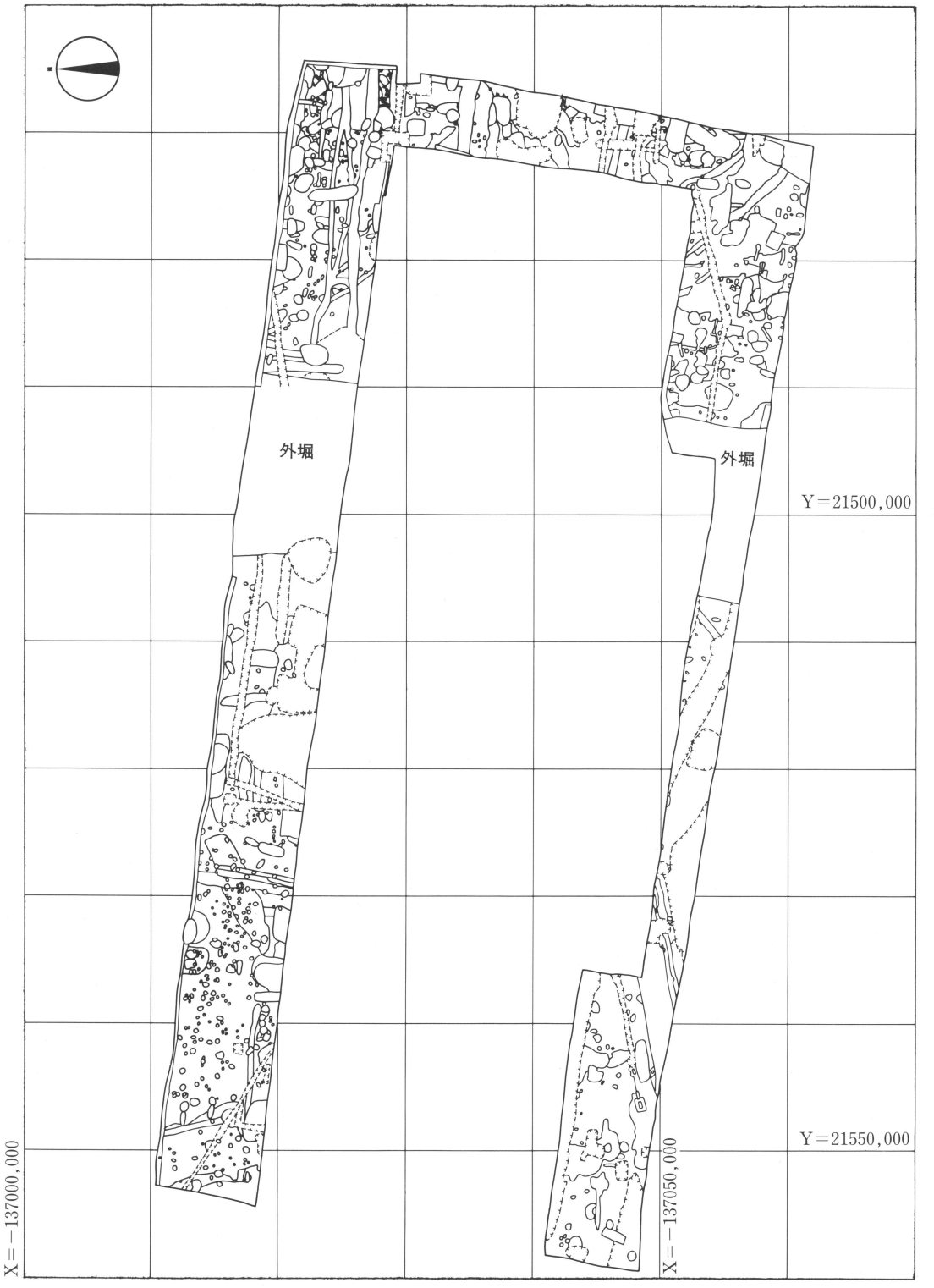
吉田城遺跡は、豊橋市八町通に所在し、豊川の左岸、朝倉川と合流する豊橋段丘上に位置する。当センターでは、89年度に実施した豊橋警察署600㎡（報告書刊行済み）につづいて、愛知県東三河事務所の建て替えに伴う跡地を今年度（1月～3月・2600㎡）と来年度（4月～7月・2700㎡）の予定で現在発掘調査を実施している。

豊橋市は、昔は吉田、それ以前は今橋と呼ばれ、永正2（1505）年にこの地にはじめて城を築いたのは、牧野古白であった。天文15（1546）年、今川義元が攻略して城代を置いたが、桶狭間の合戦後の永禄7（1564）年、徳川家康の手に帰し、酒井忠次が城主となった。忠次は城地を三の丸まで拡大したが、天正18（1590）年、徳川家康の関東移封とともに池田輝政が15万7000石をもって入封した。

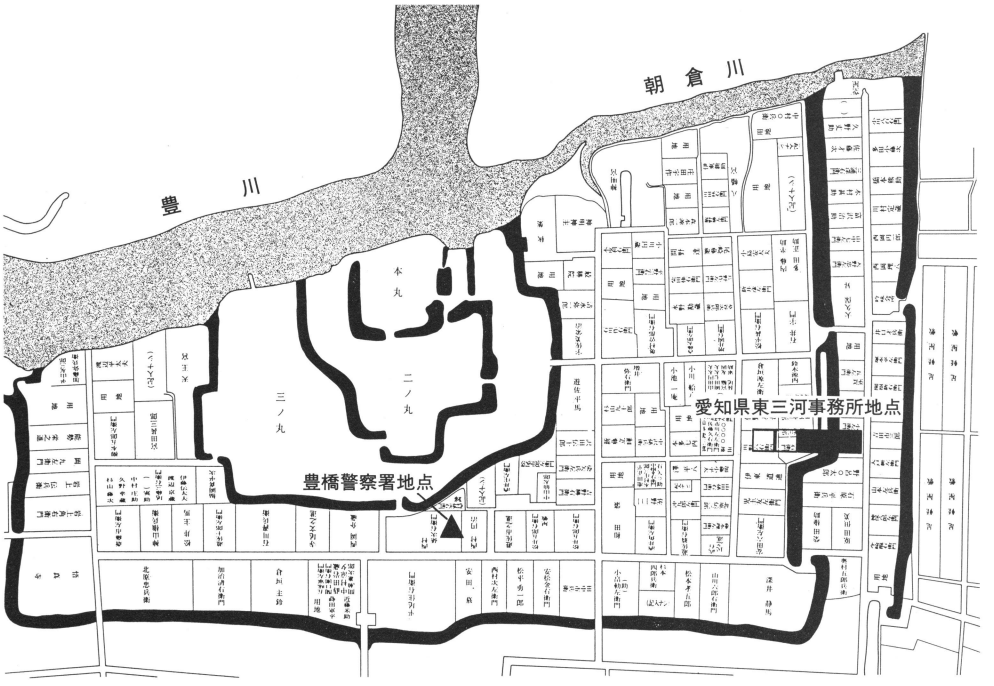
輝政も城郭を拡大し、本丸・二の丸・三の丸と外堀を梯形状に組み合わせた様式の城郭を計画した。しかし輝政は、関ヶ原の戦いの功績にて姫路に移封となり、その後入城した9家22代の譜代大名たちがいずれも3万石～7万石の小大名であったため、財政的に輝政の計画を竣工することができずに明治に至り、建物もとり払われた。



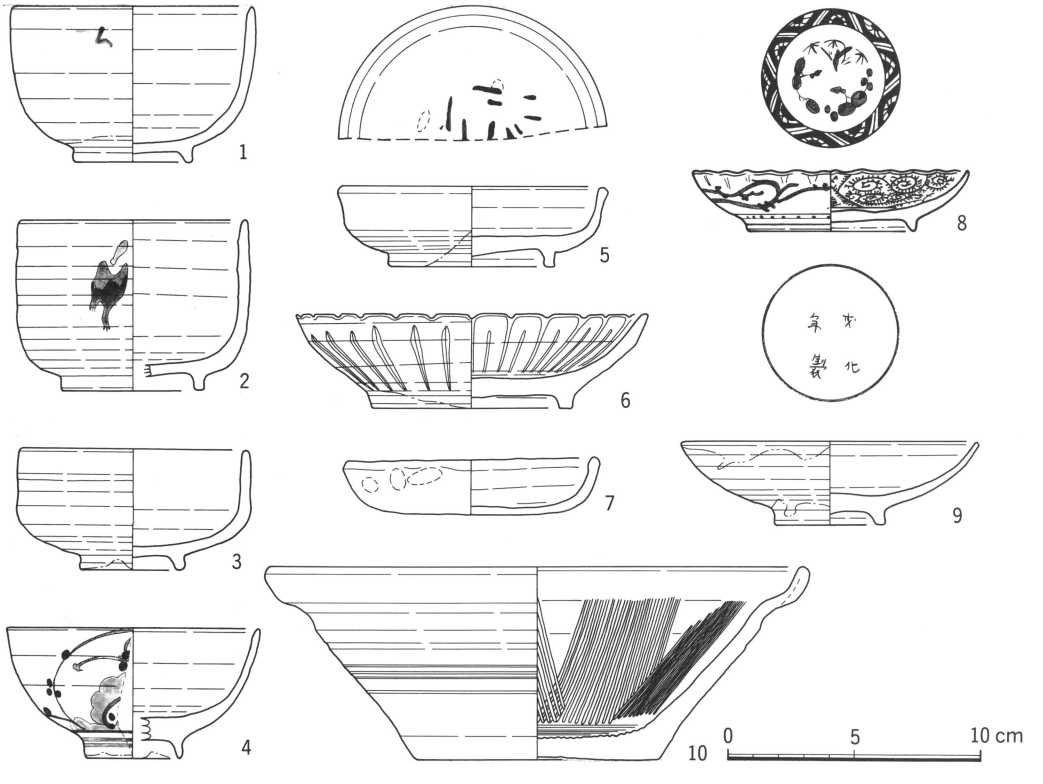
第1図　調査区位置図（1/5000）



第２図　遺構配置図（1/500）



第3図　吉田藩士屋敷図（豊橋市美術博物館所蔵）



第4図　出土遺物実測図

調査の概要

調査区は、幕末期に作成された『吉田藩士屋敷図』（第３図）によれば外堀と武家屋敷地に比定される。基本層序は、盛土→茶褐色土（包含層）→黄橙色土（地山）の順である。しかし、明治以降の煉瓦建物や愛知県三河事務所建設による攪乱が激しく、調査区中央部分は地下駐車場に利用されて深く掘り下げられており調査できず、駐車場部分も下水管などの埋設や植樹のため、遺構の残存状況は良好ではなかった。

遺構配置図（第２図）に示したなかで、外堀は数回の掘り返しを受けている上にヒューム管が埋設されており、正確な掘り方は明らかにできないが、幅約15ｍ、深さ約５ｍと思われる。外堀の周囲には、武家屋敷地と考えられる遺構である区画溝、礎石建物、井戸がみられる。出土遺物の中に山茶椀や須恵器などがみられるため、吉田城築城以前の遺構の存在が想定される。

出土遺物（第４図）としては、包含層中の近世陶磁器類を中心に掲載した。１は呉須絵の丸椀、２は鉄絵の丸椀、３は灰釉・鉄釉の腰折椀、４は染付のくらわんか椀、５は鉄絵（摺絵）の丸皿、６は灰釉の型打皿、７は土師皿、８は染付の型打皿、９は灰釉の輪禿皿、10は鉄釉の擂鉢である。ほぼ18世紀代～19世紀代のものが大半を占めるが、山茶椀や須恵器の破片も確認されている。堀からは、大窯期の錆釉の擂鉢や漆椀なども出土している。

今回の調査により、武家屋敷地の細かい区画も明らかになれば、吉田藩の城下町の変遷や前述した『吉田藩士屋敷図』との照合も可能になってくるだろう。　　（小嶋廣也）



外堀南壁セクション



外堀遺物出土状態



吉田城遺跡調査区全景